

父親と子どもたち

～現在の父子関係～

目次

はじめに	2
本報告書の要約	3
第1部 中学生からみた父親像	
第I章 調査の概要	8
第II章 父と子のコミュニケーション	10
1. お父さんとのふれ合い	10
2. お父さんとの会話	12
3. お父さんへの知識と理解	17
4. お父さん評価	21
5. お父さんへの期待	27
6. 成長発達の目標としてのお父さん	31
第III章 中学生の父親イメージ	40
1. 家庭における父親の姿	40
2. 父親に吐られたこと	43
3. 父親とうまくやっていくには	45
4. 職業人としての父親	48
第IV章 まとめに代えて	50
第2部 父親たちの抱く父親像	
第I章 父親たちの生活	54
1. 父親の仕事	54
2. 父親の家庭での生活	58
3. 父親の抱いている悩み	59
第II章 家庭での父親の役割	61
1. 父親の家庭での位置	61
2. 家庭での役割	64
第III章 父親の自己イメージ	65
1. 父親としての自己評価	65
2. 父親の類型化	67
3. 父親の役割モデル	71
第IV章 父親の教育観	75
1. 父親の教育観	75
2. 子どもに対する望み	78
資料1 調査票見本（中学生）	83
資料2 学年・性別集計表（中学生）	98
資料3 調査票見本および集計結果（父親）	117

*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。



はじめに

父親を語るとき、「父親の権威の喪失」や「家庭の中に父親の姿が見えない」などといわれて久しい。

戦後、日本の社会はこの半世紀の間に急激な変化を遂げた。社会体制や産業構造の変化は人々に価値観や規範意識の変化をもたらした。さらに、女性の社会進出と子どもの少子化の傾向も顕著である。そうした変化は家庭においても父親・母親の果たす役割に影響を与えるのは当然のように思える。

「モノグラフ・小学生ナウ」vol.11-12（日本のお父さん）によれば、小学生からみた父親像とはかつての父親的役割に母親的役割もこなす『マルチ・ロール型の父親』が子どもたちから評価され、家庭内での地位を築いているという新しい父親像が示されている。

今回は中学生の父親像を探ってみようとした。中学生の父親といえは、職場や社会では年齢的にも責任ある地位を担い、家庭では結婚生活10年以上となり夫と妻の人間関係にも変化が生じ、子どもたちは父親・母親から自立を始め自分の世界を築きつつある。さらに家庭を取り巻く環境は情報化社会の進展が著しく、男女共生型社会・高齢化社会に移りつつある。そうした中で、子どもたちは父親にどのようなイメージをもち、父親は子どもたちの成長発達にどのような役割を果たしているのだろうか。

今回は中学生調査と父親調査を試み、両面から父親像と父親の子どもの成長に果たす役割を明らかにすることを目的としたものである。

本 報 告 書 の 要 約

静 岡 大 学 教 授 深 谷 昌 志
埼 玉 県 立 小 川 高 等 学 校 教 諭 三 枝 恵 子
純 心 女 子 短 期 大 学 専 任 講 師 井 上 健
上 智 大 学 大 学 院 生 深 谷 野 亜

第 1 部 中 学 生 から みた 父 親 像

① 最近、1週間で父親とあいさつや夕食を「ほぼ毎日一緒」にした子は約4割。逆に遊びや外出、お手伝いを一緒にしたり叱られたのが「1回もない」子は約6～7割もいる（P.11 図1-3）。

② 父親と「しょっちゅう話す」ことは、勉強や成績のこと、プロ野球などのスポーツのことや職場での出来事であり、母親と話すことは勉強や成績のこと、進みたい高校のこと、学校での出来事、友だちのことなどである。子どもたちは相手によって話す内容を分けている。女子は男子に比べ父親・母親とも話す割合が高いが、特に母親とよくおしゃべりをしている（P.13 図1-4・5・6、P.16 表1-2）。

③ 父親の仕事の内容を「とてもよく知っている」子は32.5%。「だいたい知っている」を含めると、約8割の子どもたちが父親の仕事を知っていると答えている。一方、「ぜんぜん」あるいは「あまり」知らないことは父親の好きなタレントやスポーツ選手のこと、中学生の頃の様子、1か月の収入についてで、

約7割にも達している。女子のほうがよく知っている（P.17 図1-7・8）。

④ 父親が子どもの成績や得意な教科、進みたい高校のことを「とてもよく知っている」と思っている子は約2割。「だいたい知っている」を含めると約6割以下である。子どもの夢、好きなタレントやスポーツ選手はあまり知らないが、親しい友だちの名前を「5人以上知っている」父親が約3割、「4～3人知っている」を含めると約6割と、子どもたちは父親は学校関係のことについてはだいたい知ってくれているだろうと考えている（P.19 図1-9、P.20 表1-3）。

⑤ 中学時代の父親を子どもたちはスポーツが得意で明るく元気、友だちや家族との人間関係も上手に保つことができる大きな存在としている（P.22 図1-10）。

⑥ 父親の中学時代と比べ、英語の発音のうまさや英語の学力、友だちとのつきあい方は父親を超えていると思っている。一方、社会常識やけんかの仕方、基礎体力や家の手伝

い、読書量や数学の学力など人間関係のあり方や社会性では父親を超えられないと思っている（P. 25 図1-13）。

⑦ 父親に期待することのトップは体を大切にしてほしいことであり、「とても」と「わりと」を合わせると約7割。自由記述による回答でも一番多く、相変わらず仕事中心の働きすぎの父親像がうかがえる。女子のほうが父親に期待することが多い（P. 28 図1-15・16）。

⑧ 父親に相談することは、アルバイトをしたいときや中学生では高価なものを買いたいときで「絶対」と「たぶん」相談するだろうを合わせると約7割。経済的に悩んだときの相談相手にはなれても、精神的な相談相手にはなりにくい（P. 30 図1-17）。

⑨ 父親のような人に「とてもになりたい」と答えている子は12.8%、父親のような人と「とても結婚したい」とする子は5.8%と、子どもたちの成長発達目標にはなりえない父親像がうかがえる（P. 31 図1-18）。

⑩ 父親と一緒にすることで「とてもいや」なことは食べかけの食べ物を食べること（30.6%）、下着をたたむこと（19.2%）、タオルを共同で使うこと（17.7%）で、「わりと」「少し」いやだを合わせると4～6割。母親も同様な傾向にあるが、やや数値が低い（P. 36 図1-23・24、P. 37 表1-5・6）。

⑪ 父親のようになりたい群（結婚したい群）となりたくない群（結婚したくない群）を比較すると、なりたい群（結婚したい群）の子どもたちは、父親に精神的な悩みの相談相手や父親と心の交流を求めている。また、

父親の食べかけを食べることや下着をたたむこと、タオルを共同で使うこともいやではない（P. 32 図1-19・20・21・22・25・26）。

⑫ 成長発達目標となっている父親は子どもの精神的な相談相手や心の支えとして頼りにされている。また、父親と心理的な距離の近い子どもたちは、父親が子どもたちの成長発達目標になっている。父親が子どもとの心理的な距離の密接な関係を保つためには、父親と母親との関係、家庭の雰囲気なども大切な要因と考えられる。

⑬ 家にいるときの父親は新聞を読んだり、テレビを見たり、ごろごろしたりする「休息している父親」である（P. 41 図1-27）。

⑭ 父親が家庭で果たす役割として、お金を稼いで、家庭の中で重要な決定をするといった伝統的な役割と答えた子どもが約7割。一方、家庭の雰囲気を和やかにするといった、今まではどちらかといえば母親役割であると思われることも約6割と父親像の変化がみられる（P. 42 図1-28）。

⑮ 最近「叱られたことがある」のは28.2%で、子どもたちはあまり叱られていないようだ。叱られたことでは、勉強や成績のことが一番多い（P. 43 図1-30）。

⑯ 叱られ方は、いきなりどなられるというのは少なく、「理由を聞いてから悪いことだと教えてくれる」と考えている。叱られたときの気持ちは、「後で考えると叱られても仕方なかった」と納得している（37.5%）（P. 44 図1-31、P. 45 表1-7）。

⑰ 父親とうまくやっていくためには「言

われたことはきちんとやる」「家の手伝いをよくする」「お母さんの言うことをよく聞くこと」であり、「父の日や誕生日のプレゼント」や「学校のことをよく話すこと」はそれほど重要とは考えていない（P. 46 図1-32）。

⑱ 中学生の父親像には、「仕事もがんば

るが、家族も大切にす父親」「細かなことに気を配り、家族の雰囲気をやかにする父親」「悪いことをしたときは理由を聞いてから、なぜいけないか教えてくれる父親」がみいだされた。今までの母親役割と考えていたものまで引き受け、しかも父親役割も十分にこなし、子どもから尊敬される新しい父親タイプである（P. 51 図1-35）。

第2部 父親たちの抱く父親像

① 父親の通勤時間は自宅から「30分以内」が半数（55.5%）を占め、仕事をしている時間も「10時間1分～11時間」が24.8%であることなどから、1日の半分近くを仕事に費やしていることになる（P. 55 表2-1）。

② 父親は仕事についてやりがいを感じ、生きがいとしているものの、収入には満足しておらず、忙しすぎると感じている（P. 56 表2-2）。

③ 仕事におわれているが、家族に対して無関心であるわけではないようである。遅くなるときには家に電話を入れる父親は全体の半数を占め、また、子どものしつけの方針は母親と相談し、1日30分は子どもと話すようにしているなど、間接的ながら子どもの教育にも参加している（P. 58 図2-2）。

④ 父親は仕事について、時代の流れについていけないと3分の1くらいの父親が「よく」または「わりと」感じている。しかし職場に居場所がないと「よく感じている」父親

は1.0%であることから、あまり深刻ではないようである（P. 59 図2-3）。

⑤ 家庭や妻について、3割弱が「とても満足している」としており、「まあまあである」を含めれば、9割の父親が満足していると考えている（P. 60 図2-4）。

⑥ 父親の役割としては、お金を稼ぎ、家族の中で一番責任が重く、家族をリードするものだと捉えている（P. 64 図2-6）。

⑦ 父親の自己イメージとして、因子分析から「〔権威のある〕父」「友だち型」「〔身勝手な〕父」の3タイプが析出された（P. 68 表2-5）。

⑧ 「〔権威のある〕父」因子は「頼りになる」「尊敬できる」「威厳がある」などに特徴づけられ、年齢・学歴・年収の高い父親にこの傾向性が強くみられる（P. 69 図2-7）。

⑨ 「友だち型」因子は「友だちのようだ」

「おしゃれ」などから特徴づけられ、年齢が若く、妻がフルタイムで働いている父親に強くみられる（P. 70 図 2 - 8）。

⑩ 「〔身勝手な〕父」因子は「口うるさい」「自分勝手」「頑固」などに特徴づけられ、属性については特定の大きな相関がみられない因子である（P. 70 図 2 - 9）。

⑪ この父親の3つのタイプは、父親が中学生の頃自分の父親に対して抱いていたイメージと相関が高いことから、自分の父親が父親という役割のモデルとしてみなされているようである（P. 72 図 2 - 10・11・12）。

〔調査概要〕

- ・調査対象 東京・茨城・岐阜の中学1年生～3年生1,095名（男子568名・女子527名）と中学生をもつ父親1,574名
- ・調査時期 1992年10月～11月
- ・調査方法 学校通しによる質問紙調査

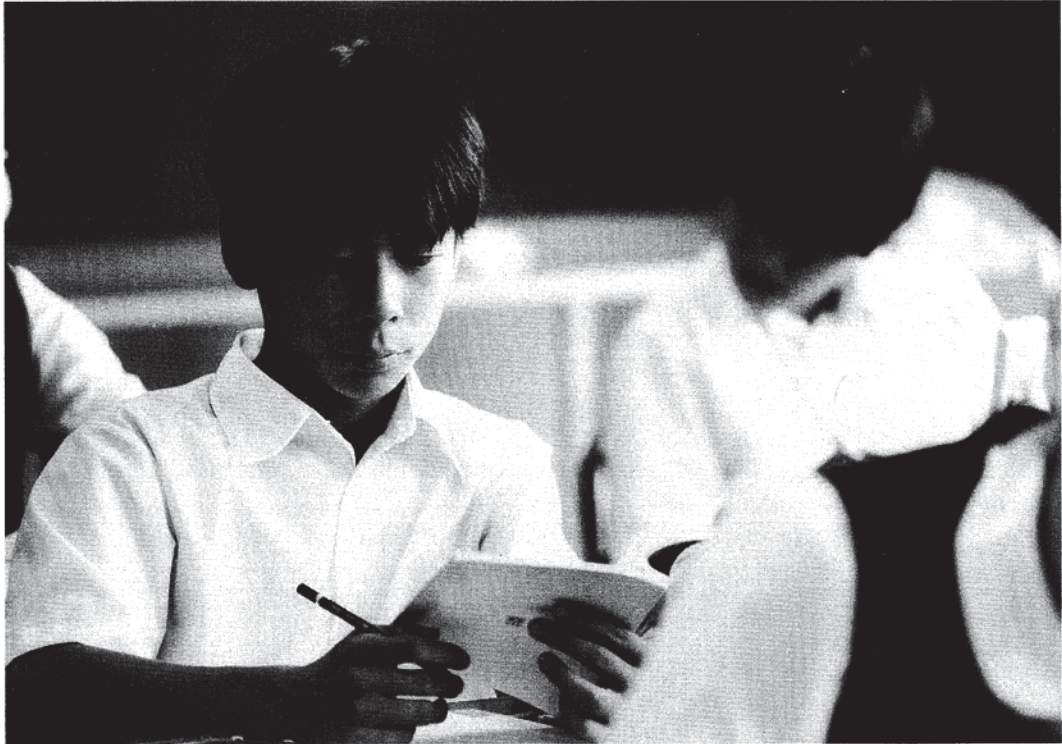
サンプル数 (人)

	男子	女子	計
中1	225	173	398
中2	142	151	293
中3	201	203	404
計	568	527	1,095

第1部
中学生からみた父親像



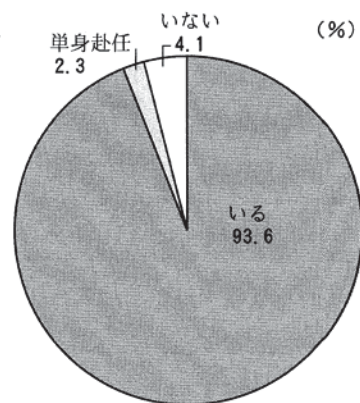
第 I 章 調査の概要



今回調査対象となったのは、東京・茨城・岐阜の中学生1,095名である。父親と同居している子は93.6%、単身赴任は2.3%、父親のいない子は4.1%である（図1-1）。両親の職業は表1-1に示す通りである。母親の職業では、専業主婦は20.8%にすぎず、何らかの職業をもっている母親の割合は約8割と高率である。

両親の関係をみると、両親が「とても仲がよい」と答えた者は26.7%、「かなり」「わりと」を合わせると85%である。次に、両親と一緒に映画やデパートに「とてもよく行く」のは5.8%、「かなり」「わりと」を含めると約4割である。子どもたちの家庭の雰囲気は両親は仲よく、2人でときどき外出を楽しんでいる様子が想像できる（図1-2）。

（図1-1）父親の有無



(表1-1) 両親の職業

(%)

父親の職業		母親の職業	
1. 会社・学校・役所 銀行に勤めている	40.8	1. 専業主婦	20.8
2. 工場に勤めている	13.5	2. パートタイム	31.6
3. お店に勤めている	5.3	3. フルタイム	13.2
4. 工場・お店を経営 している	20.0	4. お父さんと工場や お店をやっている	15.1
5. 農業・漁業	1.2	5. 農業・漁業	0.8
6. その他	14.4	6. 内職をしている	7.8
7. わからない	4.8	7. その他	10.7

(図1-2) 両親の関係

(1) 両親の仲のよさ

(%)

とても そう	かなり そう	わりと そう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない
26.7	21.8	36.3	10.2	5.0

(2) 両親は一緒に外出するか

(%)

とても よく行く	かなり 行く	わりと 行く	あまり 行かない	ぜんぜん 行かない
5.8	7.4	23.7	35.4	27.7

第Ⅱ章 父と子のコミュニケーション



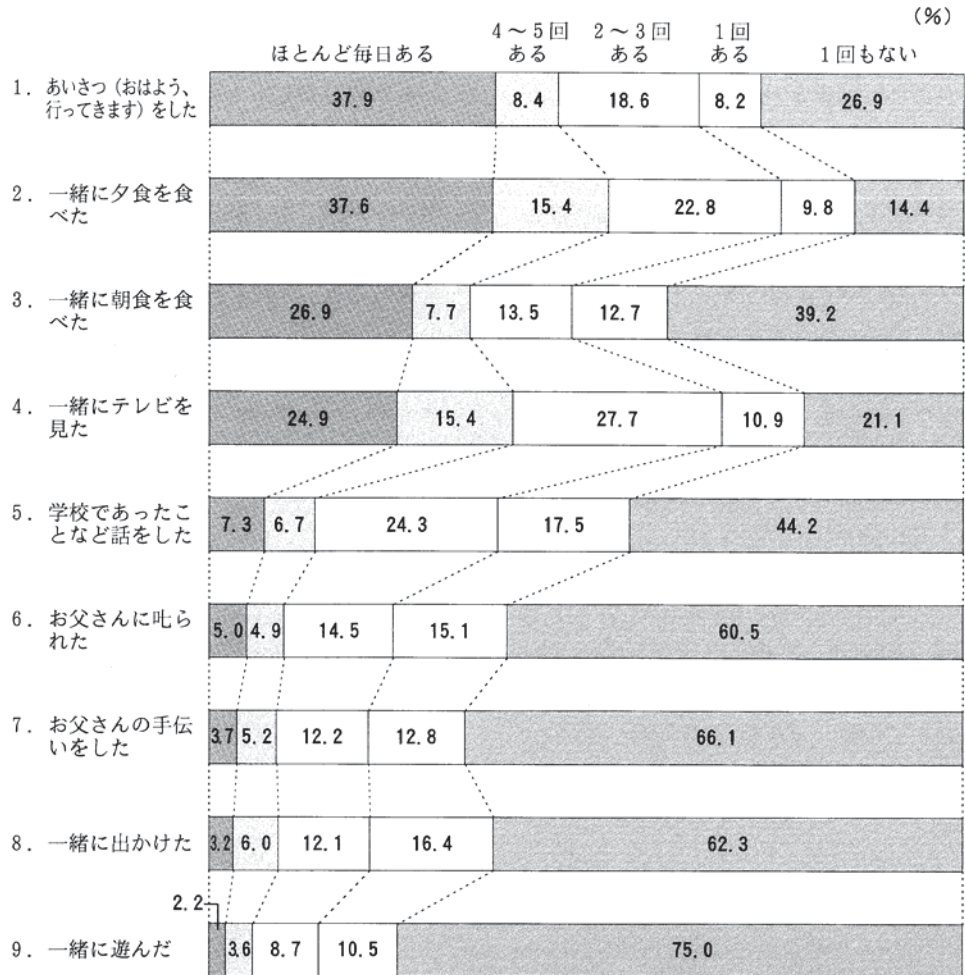
1. お父さんとのふれ合い

まず、家庭の中での父と子の様子を見てみよう。図1-3は最近1週間の父と子の関わりをみたものである。「あいさつをする」「夕食を一緒に食べる」ことを「ほとんど毎日している」と答えた割合は約38%、「朝食を一緒に食べる」「テレビを一緒に見る」割合はわずか約25%である。逆にしたことが「1回もない」のは「遊んだこと」(75.0%)、「外出したこと」(62.3%)、「手伝いをした

こと」(66.1%)、「叱られたこと」(60.5%)の項目で高い数値を示している。

また、学年が上になるにつれ「父親と一緒にする」ことの割合が減少する傾向にある。中学生になると、子どもたちは部活動や塾通いなどで時間的制約を受けることが多くなり、父親も社会的地位や責任が増し、仕事優先の生活を余儀なくされ、父と子の接触する機会があまり期待できそうにない現状である。

(図1-3) この1週間にお父さんとしたこと

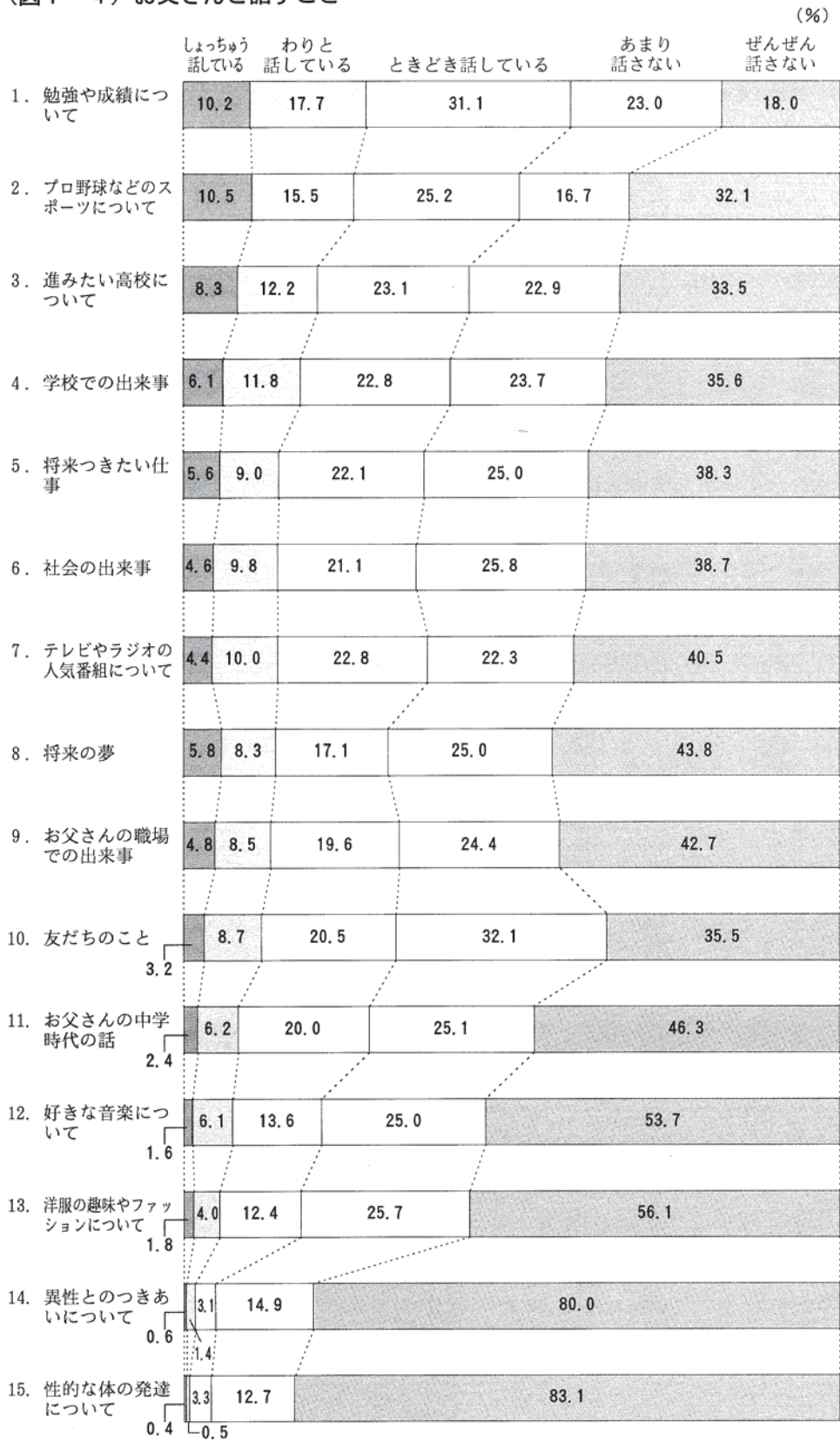


2. お父さんとの会話

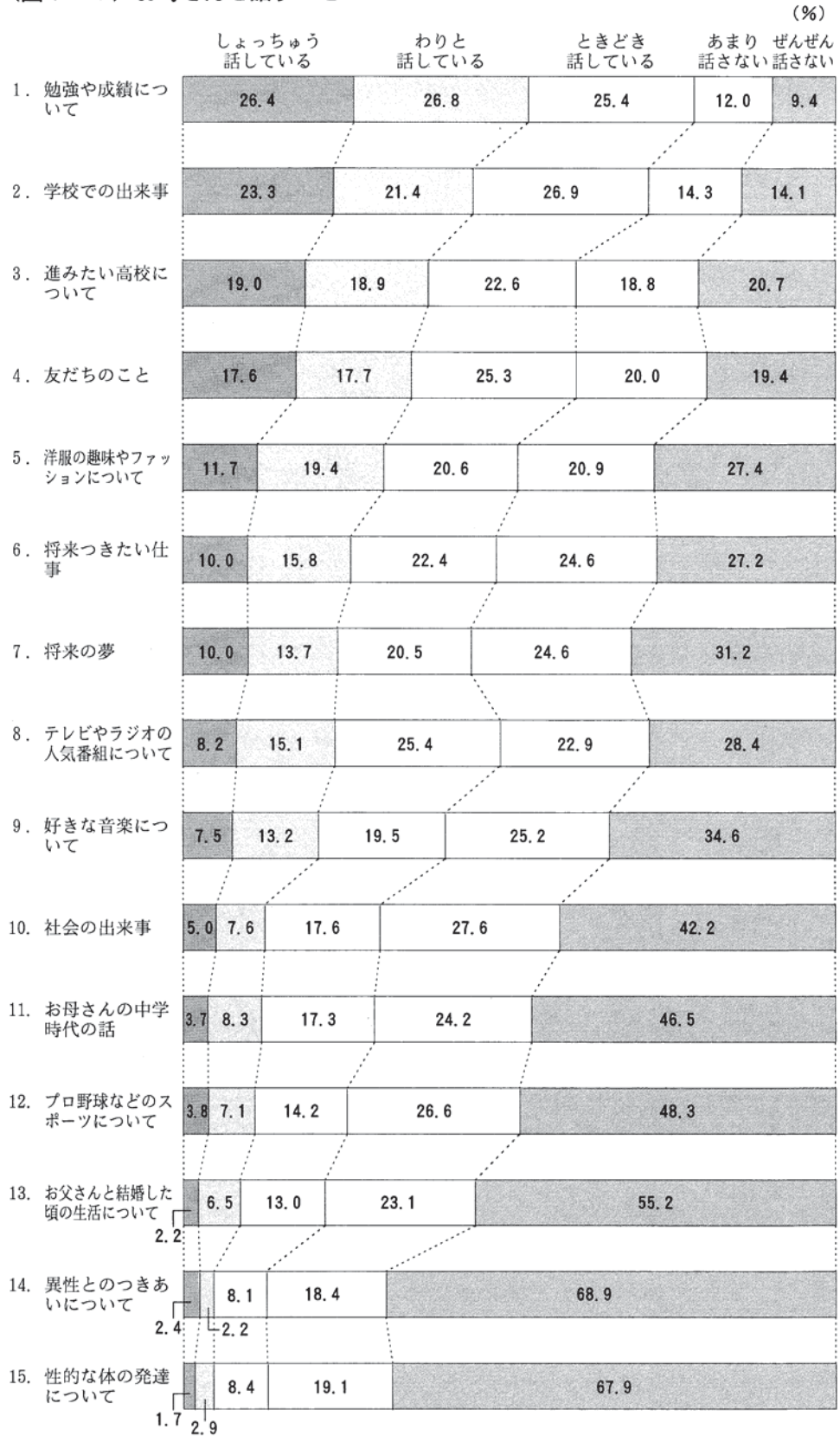
このように父親との接触の少ない中で、子どもたちは父親とどんなことをどのくらい話しているのだろうか。図1-4によれば、「勉強や成績」について「しょっちゅう話している」割合は10.2%、「プロ野球などのスポーツ」については10.5%、「わりと話している」を含めても約3割にすぎない。考えてみれば、中学生ともなれば自分たちの世界をもち、友だちとの会話に楽しみをみいだす年代には違いないが、それにしても会話量が乏しいような気がする。では、母親とはどんな会話をしているのだろうか。図1-5によれば、「勉強や成績」について「しょっちゅう話している」割合は26.4%、「学校での出来事」は23.3%、「進みたい高校について」は19.0%、「友だちのこと」は17.6%と答えており、「わりと話している」を含めると約4~5割の子

どもたちがおしゃべりをしていることになる。図1-6は子どもたちが父親、母親と話す内容である。父親とは「プロ野球などのスポーツの話」や「職場での出来事」を話し、母親とは「勉強や成績のこと」や「進みたい高校のこと」「学校での出来事」「友だちのこと」「洋服の趣味やファッションのこと」などが多く話されている。また、「異性とのつきあい」や「性的な体の発達」「好きな音楽」などは友だちと話したほうが楽しいし話しやすいだろう。子どもたちは話す相手によって話の内容を変えている様子がかがえる。次に、表1-2によれば、女子は父親・母親とも比較的多くの話をしている。特に、母親に対しての女子のおしゃべりする割合は男子に比べ著しく高い数値となっている。

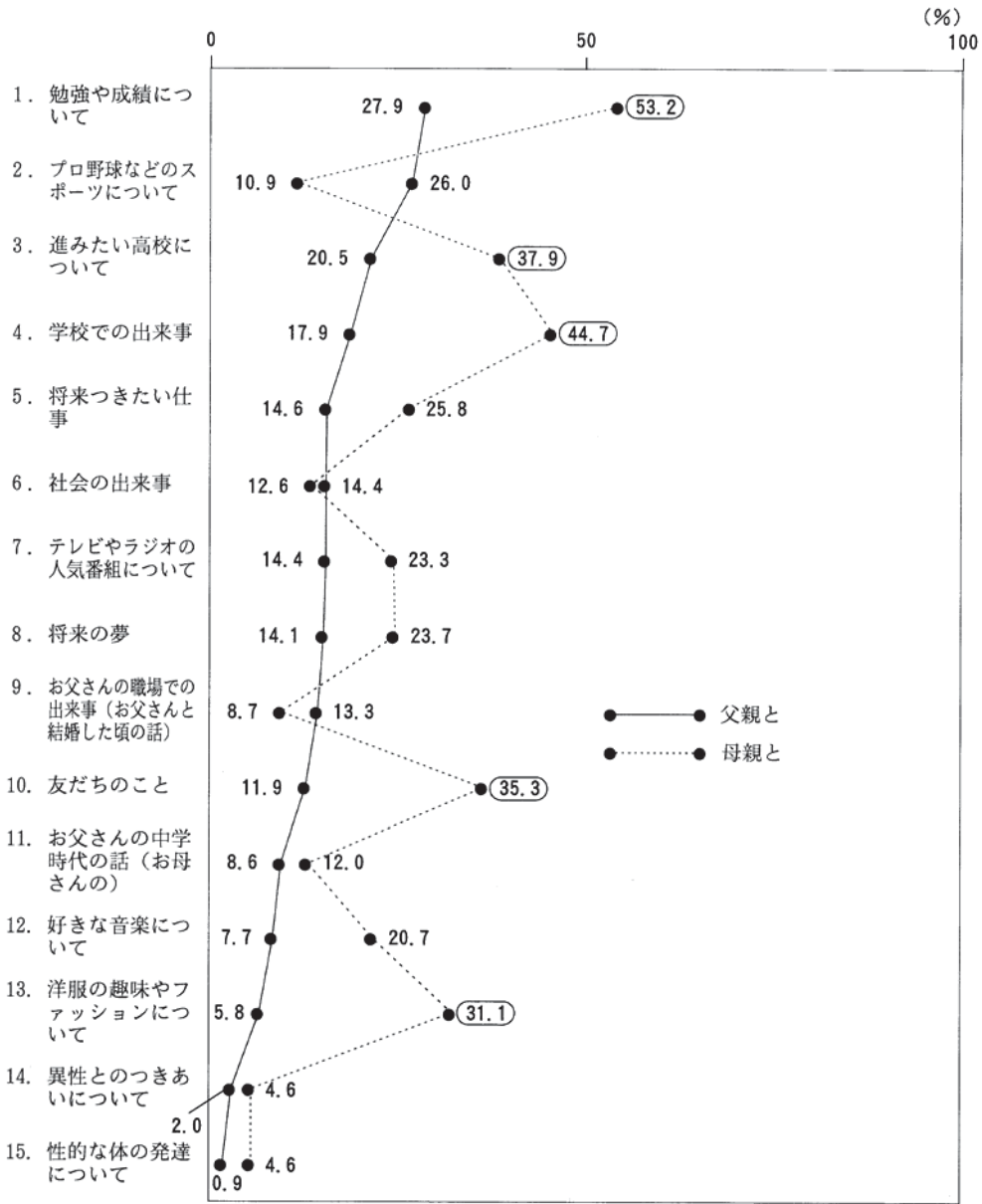
(図1-4) お父さんと話すこと



(図1-5) お母さんと話すこと



(図1-6) 会話内容 × 父親・母親



「しょっちゅう」+「わりと」話している割合

(表1-2) 会話内容 × 性別

(%)

	お父さんと			お母さんと		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子
1. 勉強や成績について	27.9 (18.0)	25.5 21.9	30.7 (13.7)	53.2 (9.4)	43.4 12.9	63.8 (5.7)
2. プロ野球などのスポーツについて	26.0 (32.1)	27.2 30.1	24.7 34.3	10.9 (48.3)	8.4 51.7	13.7 (44.5)
3. 進みたい高校について	20.5 (33.5)	20.0 34.9	21.0 (32.0)	37.9 (20.7)	30.4 25.2	46.2 (15.7)
4. 学校での出来事	17.9 (35.6)	14.2 41.3	22.1 (29.1)	44.7 (14.1)	29.7 21.0	61.1 (6.5)
5. 将来つきたい仕事	14.6 (38.3)	13.8 38.0	15.5 (38.7)	25.8 (27.2)	19.7 34.5	32.4 (19.3)
6. 社会の出来事	14.4 (38.7)	14.1 40.0	14.6 (37.4)	12.6 (42.2)	9.6 47.9	15.8 (36.1)
7. テレビやラジオの人気番組について	14.4 (40.5)	12.8 45.8	16.1 (34.6)	23.3 (28.4)	12.4 38.5	35.3 (17.3)
8. 将来の夢	14.1 (43.8)	12.2 45.9	16.0 (41.6)	23.7 (31.2)	16.8 39.8	31.2 (22.0)
9. お父さんの職場での出来事	13.3 (42.7)	12.3 46.2	14.5 (38.6)			
10. 友だちのこと	11.9 (35.5)	8.8 36.1	15.3 (35.1)	35.3 (19.4)	21.7 27.0	50.3 (11.0)
11. お父さんの中学時代の話(お母さんの)	8.6 (46.3)	6.8 51.2	10.5 (40.9)	12.0 (46.5)	6.3 58.6	18.4 (33.0)
12. 好きな音楽について	7.7 (53.7)	5.8 61.3	9.8 (45.2)	20.7 (34.6)	9.1 47.1	33.4 (21.1)
13. 洋服の趣味やファッションについて	5.8 (56.1)	4.7 61.3	7.0 (50.1)	31.1 (27.4)	13.3 42.6	50.7 (10.9)
14. 異性とのつきあいについて	2.0 (80.0)	2.1 79.9	1.8 80.3	4.6 (68.9)	1.2 75.9	8.0 (61.4)
15. 性的な体の発達について	0.9 (83.1)	1.3 79.6	0.4 86.9	4.6 (67.9)	1.1 81.0	8.4 (53.5)
16. お父さんと結婚した頃の生活について				8.7 (55.2)	5.8 66.6	11.9 (42.7)

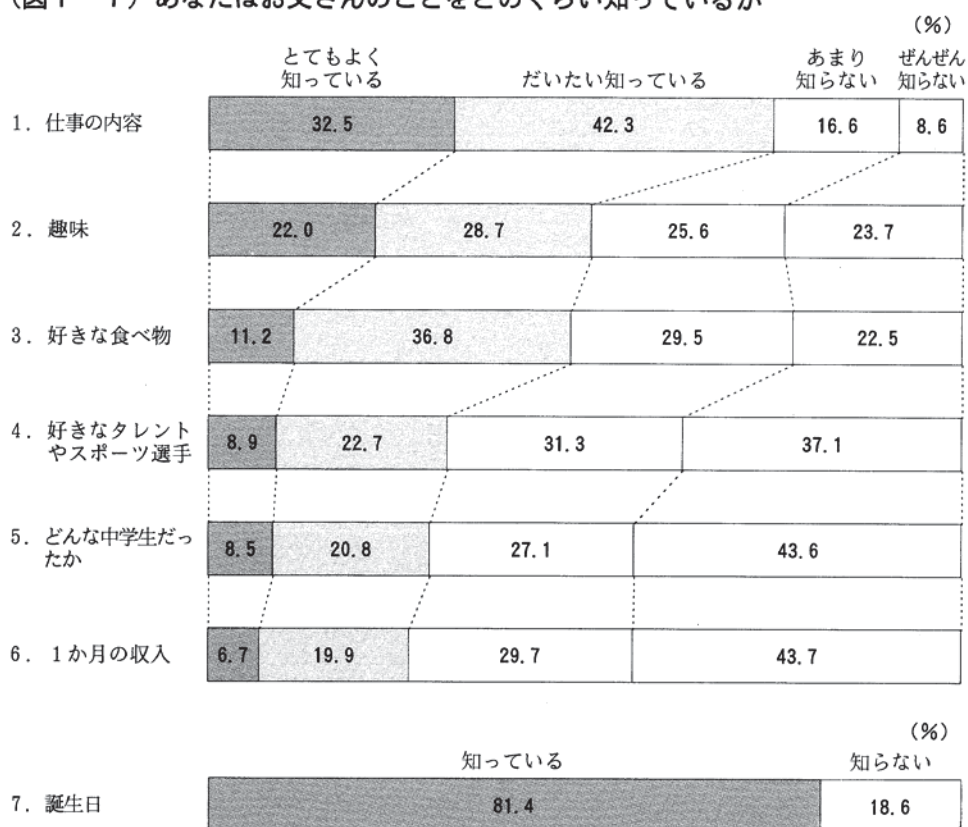
「しょっちゅう」+「わりと」話している割合
 ()内は「ぜんぜん話さない」割合

3. お父さんへの知識と理解

こうした接触量や会話量の少なさの中で、子どもたちは父親のどんなことをどのくらい知っているのだろうか。図1-7によれば、「お父さんの仕事の内容」を「とてもよく知っている」のは32.5%、「だいたい」を含めると約8割が父親の仕事についての知識をもっていることになる。次によく知っているのは「お父さんの趣味」(22.0%)、「好きな

食べ物」(11.2%)の順であり、「だいたい」を含めると約5割の子どもたちが知っていると答えている。父親との接触や会話が少ない割にはよく知っているようである。逆に、知らないことは「好きなタレントやスポーツ選手」「父親の中学生の頃の様子」「1か月の収入」で「ぜんぜん」「あまり」知らないを合わせると約7割にも達する。女子のほうが男

(図1-7) あなたはお父さんのことをどのくらい知っているか

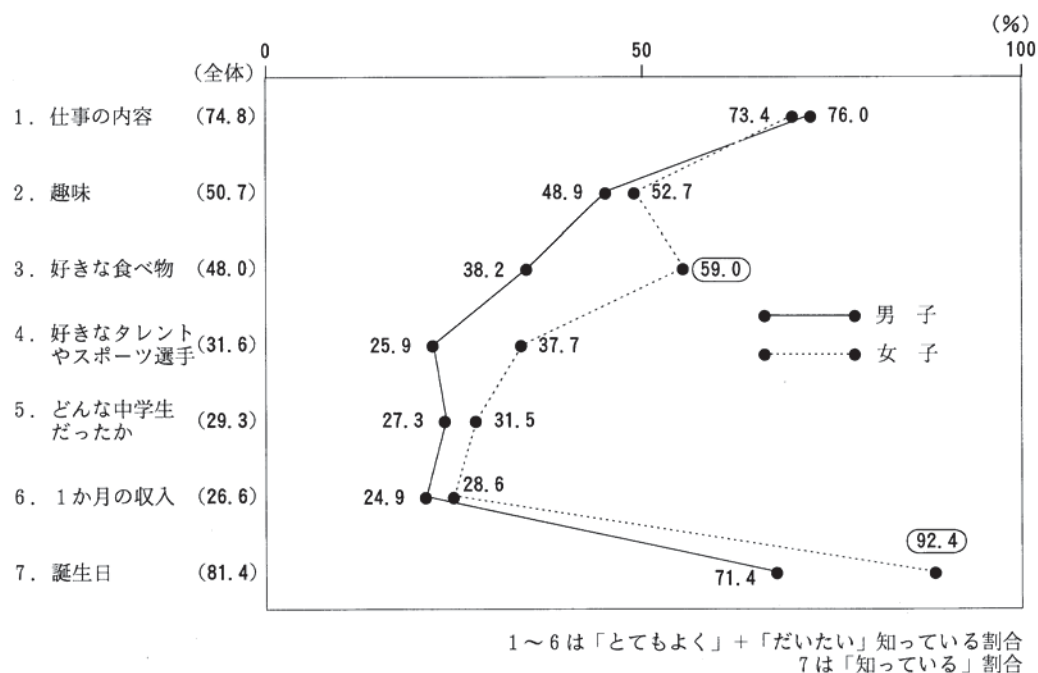


子に比べよく知っている割合が高く、「好きな食べ物」や「誕生日」の項目に男女差がみられる（図1-8）。

それでは、お父さんは子どものことをどのくらい知っていると考えているのだろうか。図1-9によれば、「成績」「得意な教科」「進みたい高校」などの学校関係のことを「とてもよく知っている」と答えた子は約2割、「だいたい知っている」を合わせると5～6割がお父さんは学校のことは知っているだろうと思っている。次に「誕生日」（91.4%）、「何年何組」（66.1%）、「担任の先生の名前」（54.2%）、さらに「親しい友だちの名前」を「5人

以上知っている」と答えた子は32.1%、父親が自分をかなり理解してくれていると考えているようである。女子のほうが理解してもらっているという気持ち強い。男子においては学年が進むにつれ「成績」や「得意な教科」「進みたい高校」「将来つきたい仕事」「親しい友だちの名前」についてよくわかっていると考えており、「誕生日」や「何年何組」「担任の先生の名前」などのことを知っている割合は減少してきている（表1-3）。学年が進むにつれ、「高校進学」「将来の仕事」などの問題が具体化し、職業人としての父親への関心の高さを示している。

（図1-8）あなたはお父さんのことをどのくらい知っているか × 性別



(図1-9) お父さんはあなたのことをどのくらい知っているか

	(%)			
	とてもよく 知っている	だいたい 知っている	あまり 知らない	ぜんぜん 知らない
1. 成績	19.0	42.5	23.2	15.3
2. 得意な教科	18.1	35.6	26.1	20.2
3. 進みたい高校	19.0	25.5	26.0	29.5
4. 将来つきたい仕事	12.5	20.2	31.5	35.8
5. 好きなタレント やスポーツ選手	9.6	20.3	29.9	40.2
6. あなたの夢	12.9	16.9	28.7	41.5

	(%)	
	知っている	知らない
7. 誕生日	91.4	8.6
8. 何年何組	66.1	33.9
9. 担任の先生の名前	54.2	45.8

	(%)				
	5人以上 知っている	4~3人 知っている	2人 知っている	1人 知っている	ぜんぜん 知らない
10. 親しい友だちの名前	32.1	30.8	16.0	7.1	14.0

(表1-3) お父さんはあなたのことをどのくらい知っているか × 性別・学年

(%)

	男 子			女 子		
	1年	2年	3年	1年	2年	3年
1. 成績	54.3	60.7	66.0	66.2	55.4	65.8
2. 得意な教科	50.0	48.5	51.9	63.8	45.0	60.6
3. 進みたい高校	19.8	27.1	73.7	30.9	26.4	80.4
4. 将来つきたい仕事	25.8	21.4	35.6	38.6	28.6	43.5
5. 好きなタレントやスポーツ選手	23.5	25.7	25.8	36.8	30.7	38.0
6. あなたの夢	24.8	22.1	27.8	38.6	28.6	36.5
7. 誕生日	90.8	92.8	89.1	93.8	92.0	90.7
8. 何年何組	73.4	61.2	60.7	77.6	62.0	59.6
9. 担任の先生の名前	59.6	51.8	54.7	59.9	46.0	50.3
10. 親しい友だちの名前	34.4	36.0	40.1	29.8	24.3	26.5

1～6は「とてもよく」+「だいたい」知っている割合

7～9は「知っている」割合

10は「5人以上知っている」割合

4. お父さん評価

さて、子どもたちは父親たちに対しどのような評価をしているのだろうか。

まず、子どもたちに中学時代の父親を想像してもらい、父親の中学時代をどのようにイメージしているかたずねてみた。図1-10によれば、子どもたちは中学時代の父親を遊びが得意で、明るく元気でスポーツが得意、辛抱強くかつ約束は必ず守り、そして友だちが多く、家族に親切な子どもだったと好意的な評価をしている。女子は男子に比べ父親への評価が高いことが示されている(図1-11)。

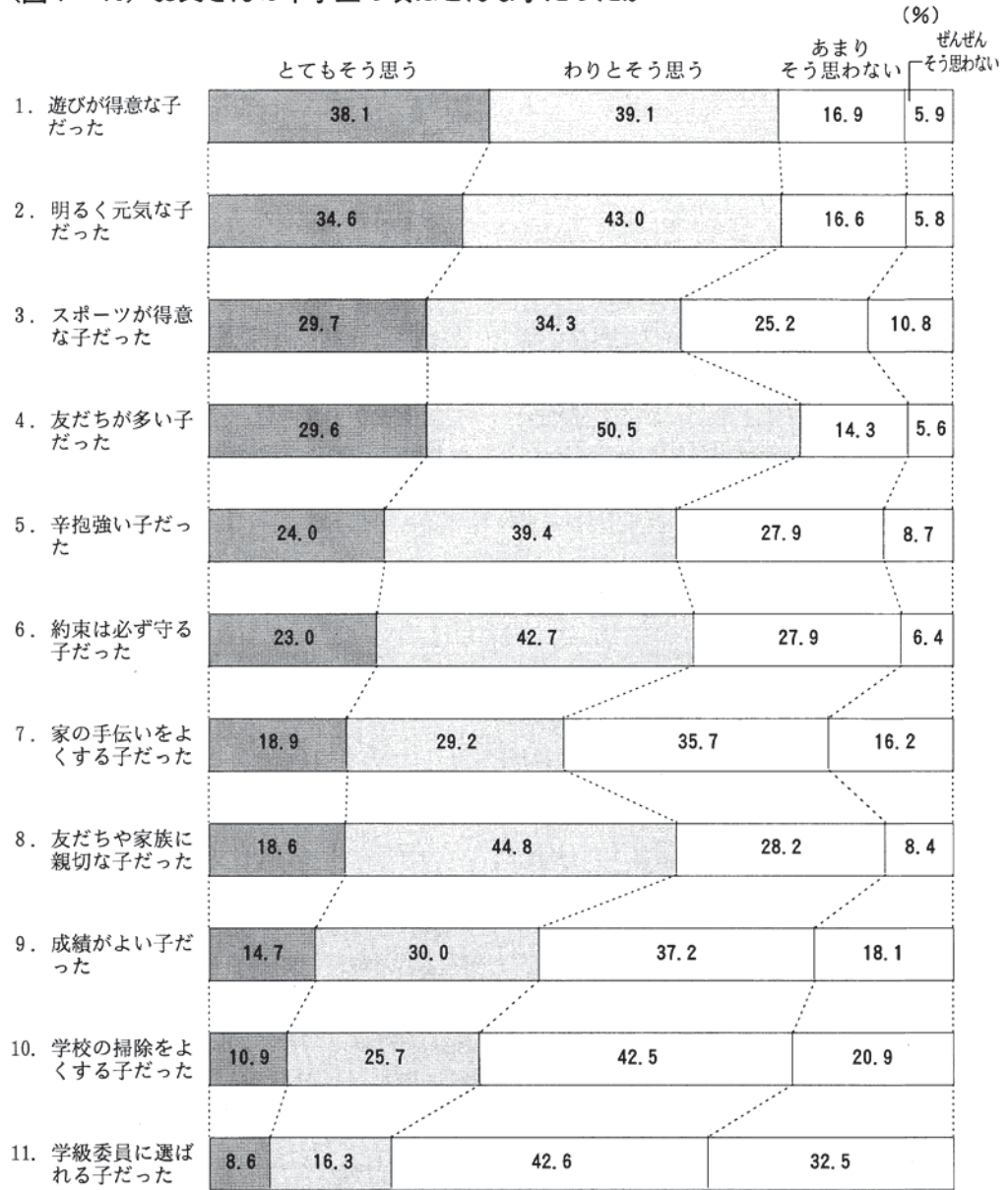
では、子どもたちの自己評価と比べてみよう。図1-12は子どもたちの自己像である。「健康」で「友だちが多く」「スポーツが好き」で「家族から大切にされている」と答える子は「とても」「わりと」そうを合わせると6~8割である。図は省略したが、女子に比べ男子のほうが、わずかではあるが自分に自信のある姿をもっている。学業成績をみると、「勉強が得意」について「とても」「わりと」そう思う割合は20.6%、クラスの中での成績が「上のほう」と思っている子は7.9%と低い評価をしている(表1-4)。一方、父親への成績評価では「成績のよい子だっ

た」と「とても」「わりと」そう思う割合は約45%と高い評価をしている(図1-10)。

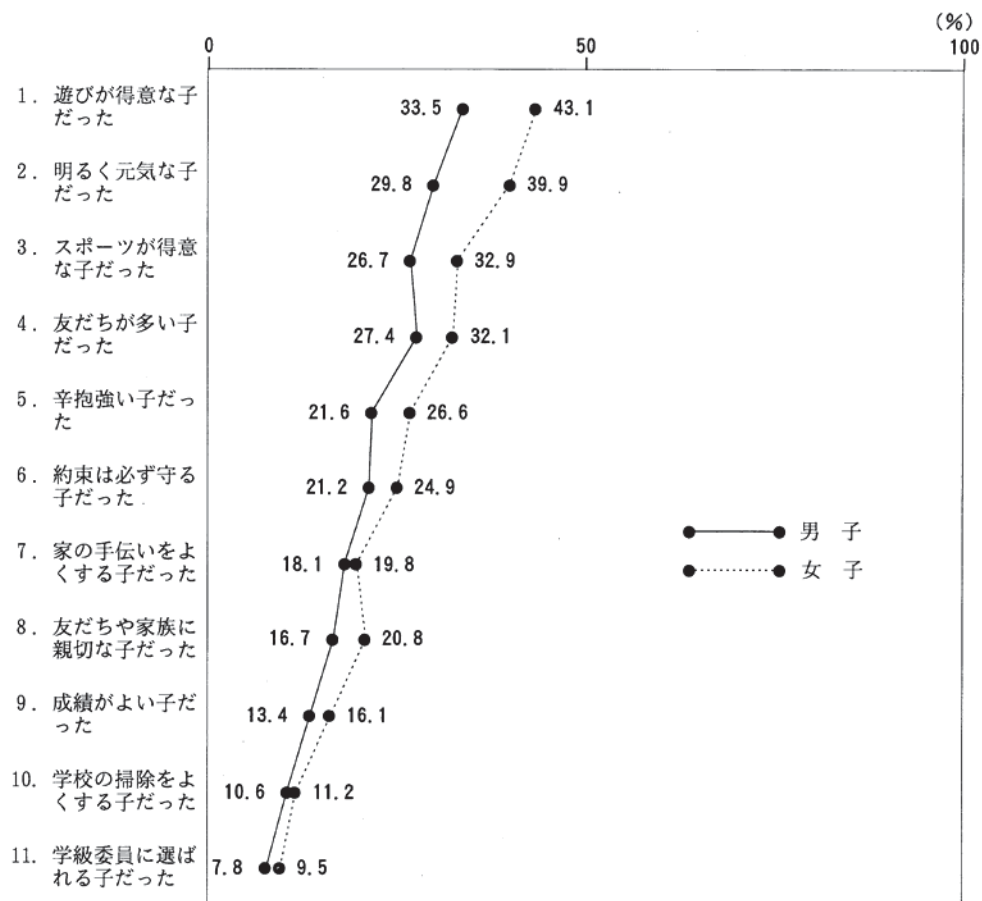
もう少し数値を追ってみたい。図1-13は中学時代の父親を子どもたちがどの程度超えられたかをたずねたものである。「英語の発音のうまさ」「人を楽しませること」「友だちとのつきあい方」「英語の学力」では、父親の中学時代を超えたと考えている。現在の英語教育からすれば、英語の発音や学力で父親を超えられたと考えるのは当然であろう。父親を超えられない項目は「遊びのうまさ」「身長」「数学の学力」「自由な時間の使い方」「家の手伝い」「読書量」「基礎体力」「けんかの仕方」「社会常識」である。すなわち、人間関係のあり方や体力・体格、社会常識や数学の学力などで中学時代の父親を大きな存在として捉えている。

また、家の手伝いや社会常識、体力・体格に男女差がみられる(図1-14)。男子では学年が上がるにしたがって父親の中学時代を超えているとする割合が高くなるものの、全体的にはなかなか父親の中学時代を超えられないと考えている子どもの姿がみられる。

(図1-10) お父さんの中学生の頃はどんな子だったか

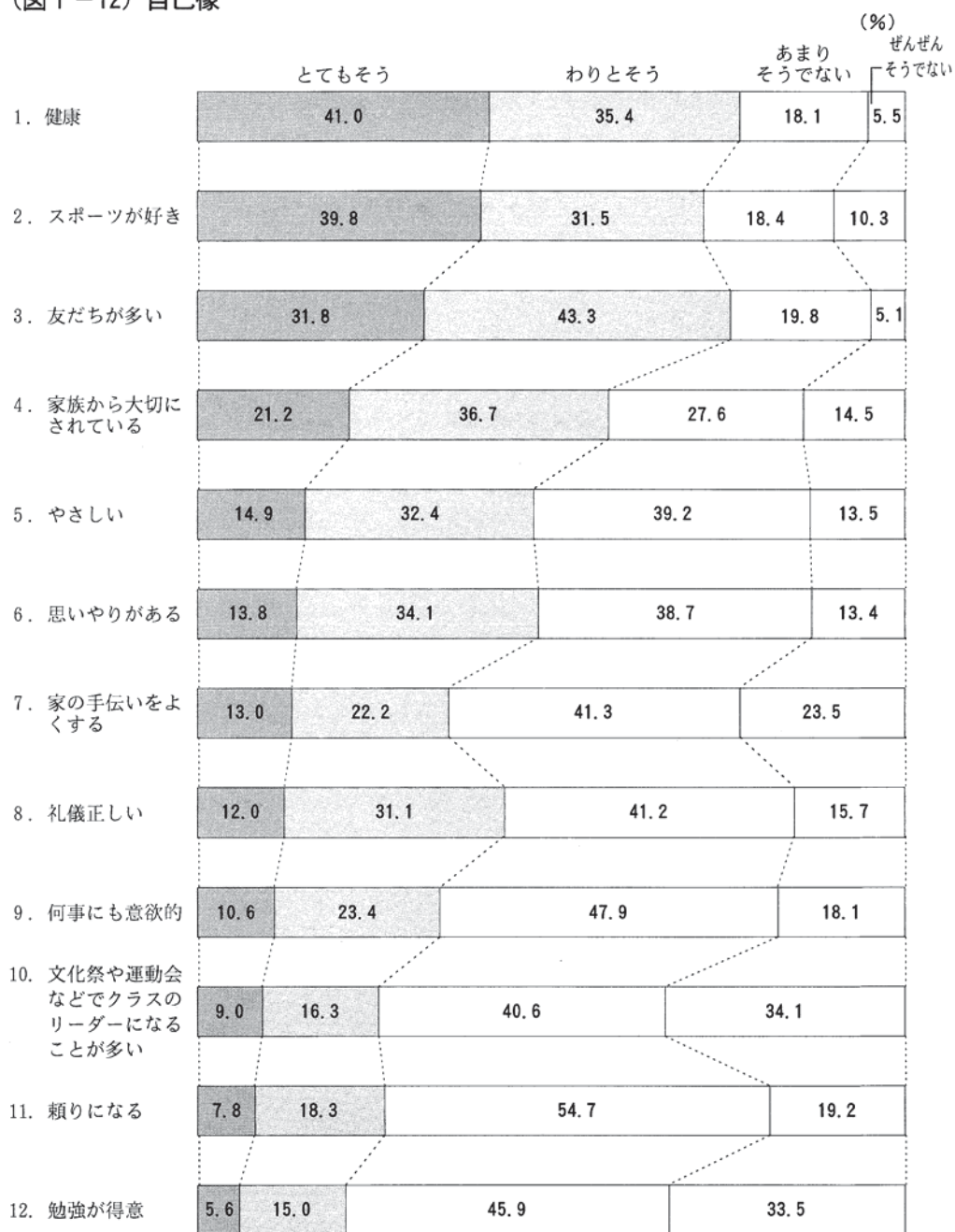


(図1-11) お父さんの中学生の頃はどんな子だったか × 性別



「とてもそう思う」割合

(図1-12) 自己像



(表1-4) 成績

(%)

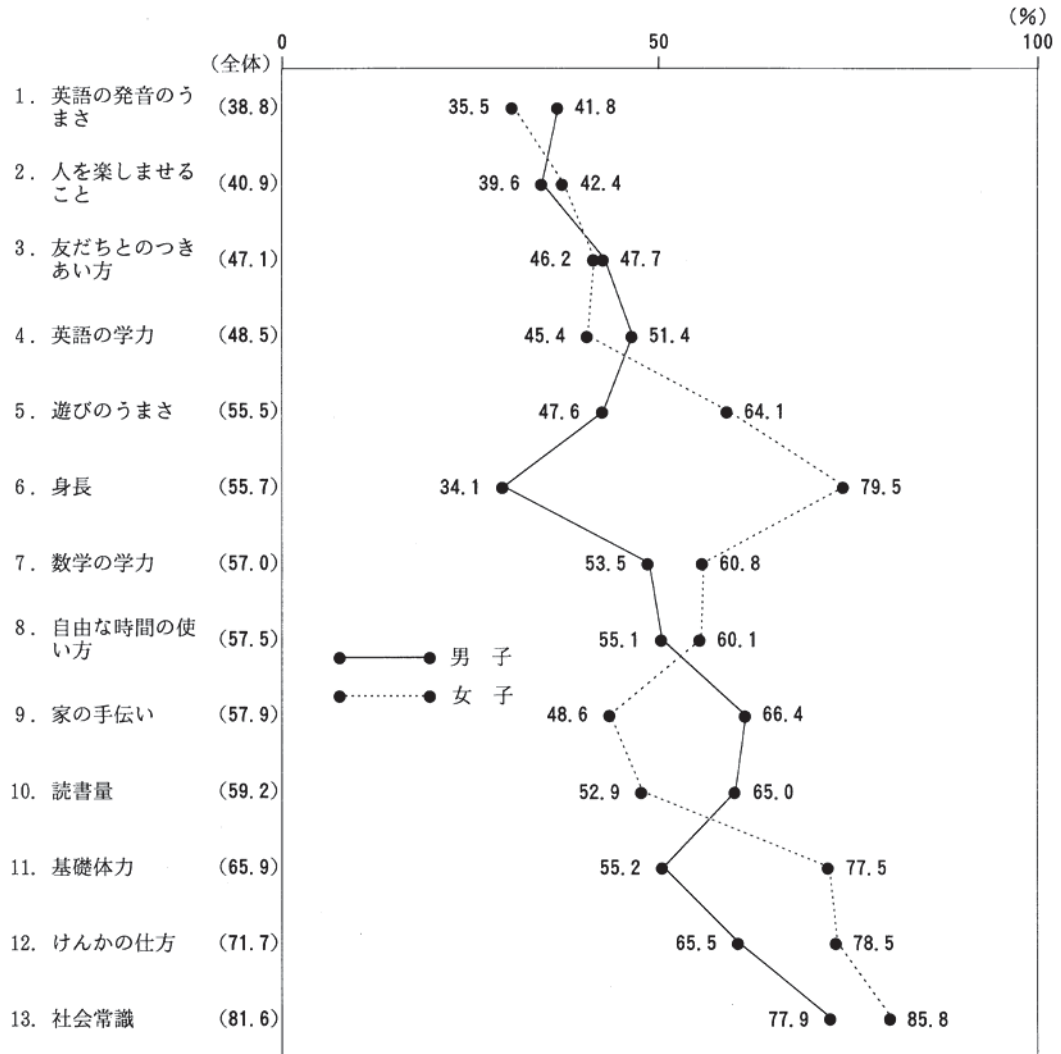
	上のほう	中の上	まん中くらい	中の下	下のほう
全体	7.9	18.8	35.5	21.3	16.5
男子	10.2	19.0	33.4	21.3	16.1
女子	5.6	18.7	37.5	21.3	16.9

(図1-13) お父さんの中学時代と比べて

(%)

	絶対自分の ほうが上	どちらかといえば 自分のほうが上	どちらかといえば 父親のほうが上	絶対父親の ほうが上
1. 英語の発音のうまさ	22.3	38.9	24.8	14.0
2. 人を楽しませること	20.3	38.8	29.8	11.1
3. 友だちとのつきあい方	15.9	37.0	37.0	10.1
4. 英語の学力	21.5	30.0	28.7	19.8
5. 遊びのうまさ	19.4	25.1	34.7	20.8
6. 身長	23.0	21.3	30.5	25.2
7. 数学の学力	17.9	25.1	32.4	24.6
8. 自由な時間の使い方	16.6	25.9	43.4	14.1
9. 家の手伝い	14.1	28.0	36.0	21.9
10. 読書量	14.3	26.5	34.6	24.6
11. 基礎体力	12.5	21.6	43.6	22.3
12. けんかの仕方	11.2	17.1	44.2	27.5
13. 社会常識	5.6	12.8	47.9	33.7

(図1-14) お父さんの中学時代と比べて × 性別



「絶対」+「どちらかといえば」父親のほうが上の割合

5. お父さんへの期待

父親を高く評価し、中学時代の父親をなかなか超えられない子どもたちは、父親をどんなときに頼り、父親にどのような期待をもっているのだろうか。図1-15はお父さんにしてほしいことをたずねてみた。「体を大切にしてほしい」と「とてもそう」思う割合は34.1%、「わりと」を含めると約7割の子どもたちが父親の健康を心配している。子どもたちに自由記述により書いてもらった中でも、健康と仕事への関心は高い。そこには相変わらず働きすぎの企業中心の父親像が浮かんでくる。図1-16は性差を示したものである。

自由記述の中で多かったことは、以下の通りである。女子のほうが、健康面での父親へのやさしさや思いやりをもった記述が多かった。

〈健康管理〉

- ・いつまでも健康でいて
- ・体を大切に
- ・無理なことをしないで
- ・お酒とタバコをやめて
- ・家でゆっくり休んで
- ・仕事を休んで、体を休めて

〈金銭・物品の要求〉

- ・お小遣いを上げて

- ・ほしいものを買って
- ・どこかに連れて行って

〈仕事のこと〉

- ・しっかり働いて
- ・仕事をがんばって
- ・お金をいっぱい稼いで

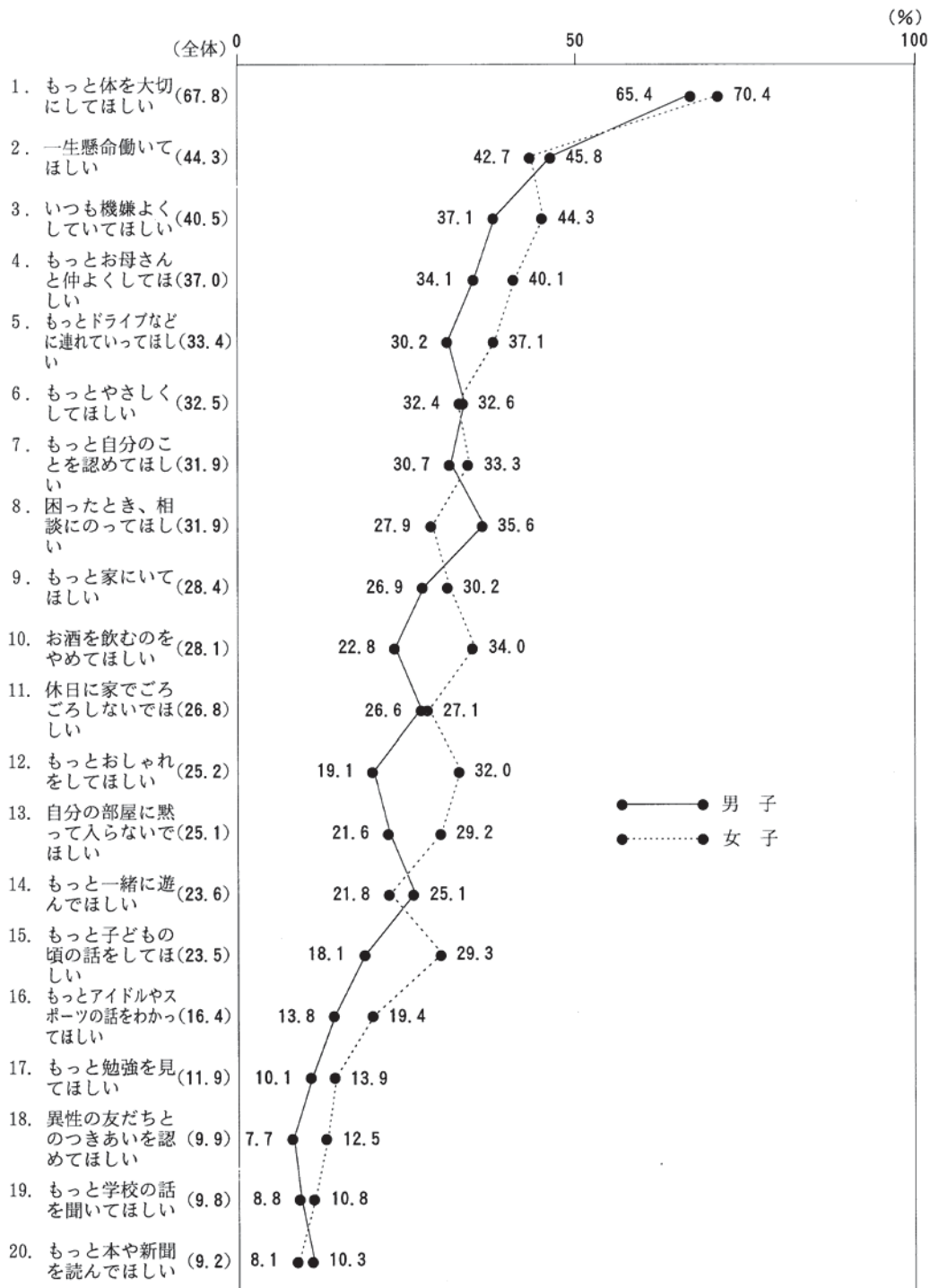
次に、お父さんがどのくらい頼りにされているかをみていきたい。図1-17によれば、子どもたちが困ったとき父親に相談するのは、「アルバイトをしたいとき」に「絶対するだろう」と答えた子は31.5%、「ほしいものがあるが中学生にとっては高価なものとき」では30.8%、「たぶんするだろう」を含めると約7割の子どもたちが、経済的な悩みを抱いたとき父親を頼りにしている。次に「進学」や「将来の職業」の問題で約6割の子どもたちが父親を頼りにしている。図は省略したが、この傾向は女子に顕著にみられる。子どもたちは「家庭の経済を支える人」「職業人・社会人」としての父親に期待を抱いているようである。一方、成績が下がったときや学校がなんとなく楽しくなかったり、人間関係の悩みのような精神的な問題の相談相手にはなりえていないようである。

(図1-15) お父さんにして欲しいこと

(%)

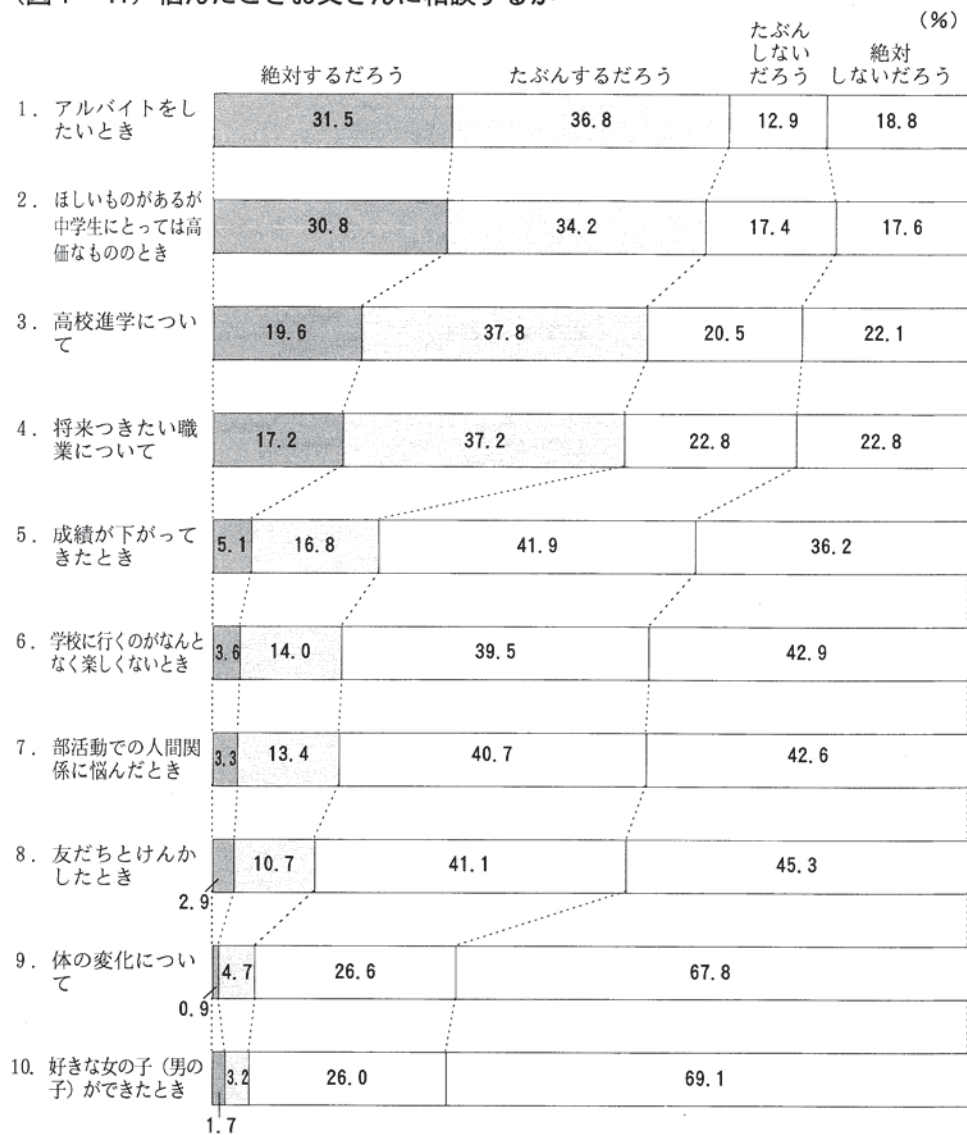
	とてもそう		わりとそう		あまり そうでない	ぜんぜん そうでない
1. もっと体を大切に してほしい	34.1		33.7		18.5	13.7
2. 一生懸命働いて ほしい	24.3	20.0	27.9			27.8
3. いつも機嫌よく してほしい	18.8	21.7	29.3			30.2
4. もっとお母さんと 仲よくしてほしい	16.5	20.5	32.4			30.6
5. もっとドライブなど に連れて行ってほ しい	13.6	19.8	32.6			34.0
6. もっとやさしく してほしい	15.9	16.6	37.5			30.0
7. もっと自分のこと を認めてほしい	14.1	17.8	37.7			30.4
8. 困ったとき、相談 にのってほしい	9.4	22.5	42.0			26.1
9. もっと家にいて ほしい	9.3	19.1	37.8			33.8
10. お酒を飲むのを やめてほしい	14.4	13.7	28.1			43.8
11. 休日に家でごろご ろしないでほしい	12.3	14.5	33.6			39.6
12. もっとおしゃれを してほしい	8.2	17.0	41.1			33.7
13. 自分の部屋に黙っ て入らないでほ しい	12.5	12.6	29.7			45.2
14. もっと一緒に遊ん でほしい	7.9	15.7	41.8			34.6
15. もっと子どもの頃 の話をしてほしい	8.5	15.0	38.4			38.1
16. もっとアイドルや スポーツの話わか ってほしい	6.4	10.0	38.9			44.7
17. もっと勉強を見て ほしい	3.7	8.2	37.6			50.5
18. 異性の友だちとの つきあいを認め てほしい	4.3	5.6	31.5			58.6
19. もっと学校の話を 聞いてほしい	3.6	6.2	45.4			44.8
20. もっと本や新聞を 読んでほしい	3.7	5.5	36.5			54.3

(図1-16) お父さんにして欲しいこと × 性別



「とても」+「わりと」その割合

(図1-17) 悩んだときお父さんに相談するか



6. 成長発達の目標としてのお父さん

子どもたちは父親の健康を心配するやさしさをもち、ほどほどに父親を相談相手とし、頼りにしている。中学時代の父親像には好意的で、子どもたちは中学時代の父親をなかなか超えられそうにない大きい存在として認識している。そうした子どもたちにとって父親は成長発達の目標となりえるのだろうか。ここでは子どもたちに、父親のような人になりたいか(父親のような人と結婚したいか)の項目を使って目標となりえるか探っていききたい。

図1-18によれば、父親のように「とてもになりたい」12.8%、父親のような人と「とても結婚したい」5.8%と父親の肯定率はかなり低い。逆に、「ぜんぜんなりたくない」と答えた子は16.9%、「ぜんぜん結婚したくない

い」とする子は23.1%と、父親を否定的に捉えている。彼らは自分の成長発達の目標として父親を受け入れていないようである。

では、成長発達の目標と『なりえる父親』と『なりえない父親』では、子どもとの関係の中でどのような差がみられるのだろうか。まず、男子はお父さんのように「とてもになりたい」の12.8%を『なりたい群』、「ぜんぜんなりたくない」の16.9%を『なりたくない群』として、女子は「とても+わりと結婚したい」17.0%を『結婚したい群』、「ぜんぜん結婚したくない」23.1%を『結婚したくない群』として父親との関わりをみていきたい。

図1-19・1-20から、相談相手としての両群の差をみると、全ての項目で『なりたい

(図1-18) 成長発達の目標

(1) お父さんのようになりたいか (男子)

(%)

とても なりたい	わりと なりたい	どちらでもない	あまり なりたくない	ぜんぜん なりたくない
12.8	21.7	34.9	13.7	16.9

(2) お父さんのような人と結婚したいか (女子)

(%)

とても したい	わりと したい	どちらでもない	あまり したくない	ぜんぜん したくない
5.8	11.2	40.8	19.1	23.1

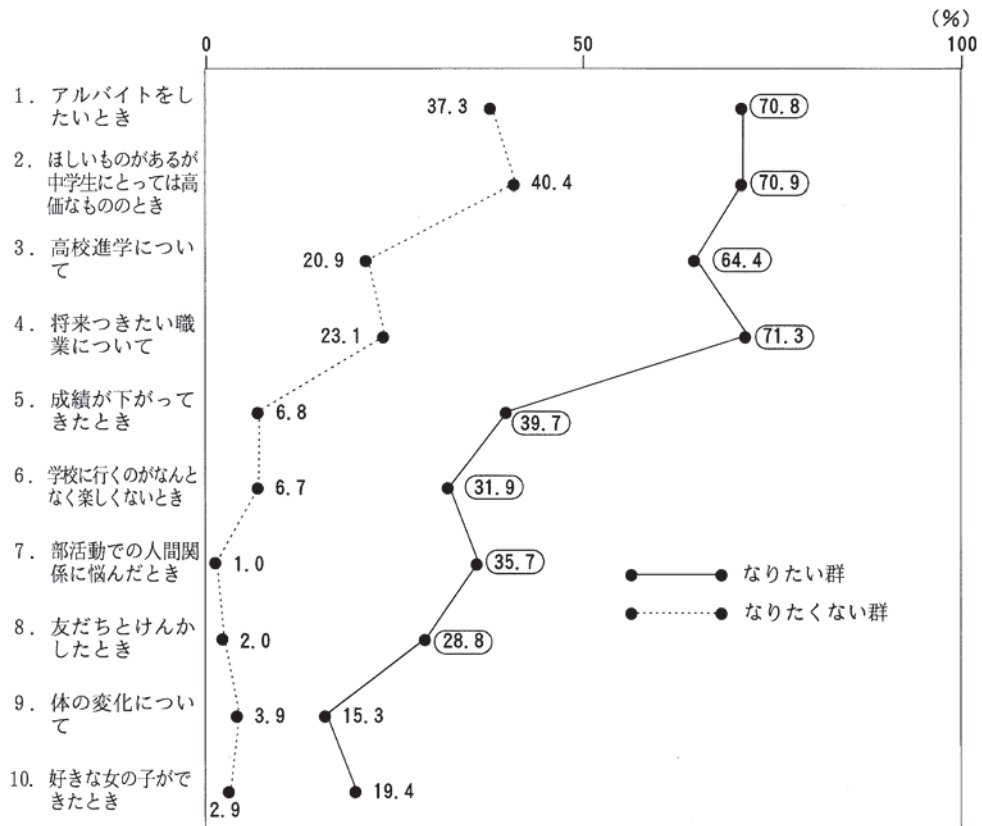
群』は父親を頼りにしている。男子では職業、進学の問題で、女子は成績が下がってきたとき、学校に行くのがなんとなく楽しくないときや人間関係に悩んだときなど精神的な項目での差が顕著である。

図1-21・1-22は父親への要望や期待との関係を示したものである。男子では「体を大切にしてほしい」「困ったとき、相談にのってほしい」「もっと家にいてほしい」「一緒に遊んでほしい」の項目に差が著しく、『なりたい群』はもっと父親との接触や心の交流を深めたいと考えている。女子において『結婚したい群』は父親との精神的つながりを強く求めているようである。

もう少し子どもの心の中を探ってみよう。

図1-23は父親との心理的距離をみるために、「食べかけの食べ物を食べる」「下着をたたむ」「タオルを共同で使う」「自分の部屋に入る」「並んで歩く」「2人で食事をする」の6項目を使い、父親と一緒にすることの不快感をたずねたものである。「食べかけの食べ物を食べる」を「とてもいやだ」と答えた子は30.6%、「わりと」「少し」を合わせると約6割の子どもたちが不快感をあらわしている。「下着をたたむ」(19.2%)、「タオルを共同で使う」(17.7%)、「自分の部屋に入る」(15.5%)、「並んで歩く」(12.1%)、「2人で食事をする」(10.1%)、「わりと」「少し」いやだ

(図1-19) 悩んだときお父さんに相談するか × お父さんのようになりたい(男子)



「絶対」+「たぶん」するだろうの割合

を合わせると約4割。母親との関係もほぼ同様な数値を示している(図1-24)。父親も母親もほどほどの距離をおいた接触や相談相手にはなれるが、子どもたちの心の中までは受け入れるのはむずかしいようである。表1-5・1-6は性別・学年別を示した。

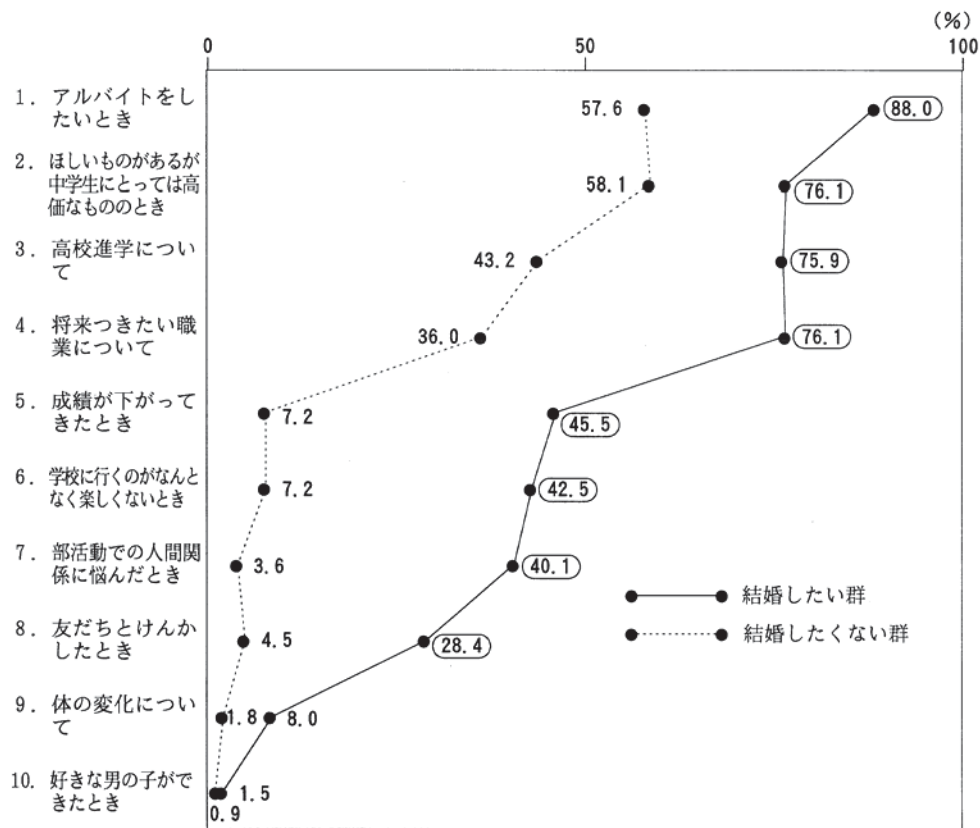
図1-25・1-26に示したように、父親のように『なりたい群』と『なりたくない群』では全ての項目で著しい差がみられる。女子も同様である。『なりたい群』『結婚したい群』では「とてもいやだ」の割合が10%以下である。

子どもの成長発達の中で目標になれる父親は、子どもとの心理的距離も密接に保つこと

ができそうである。

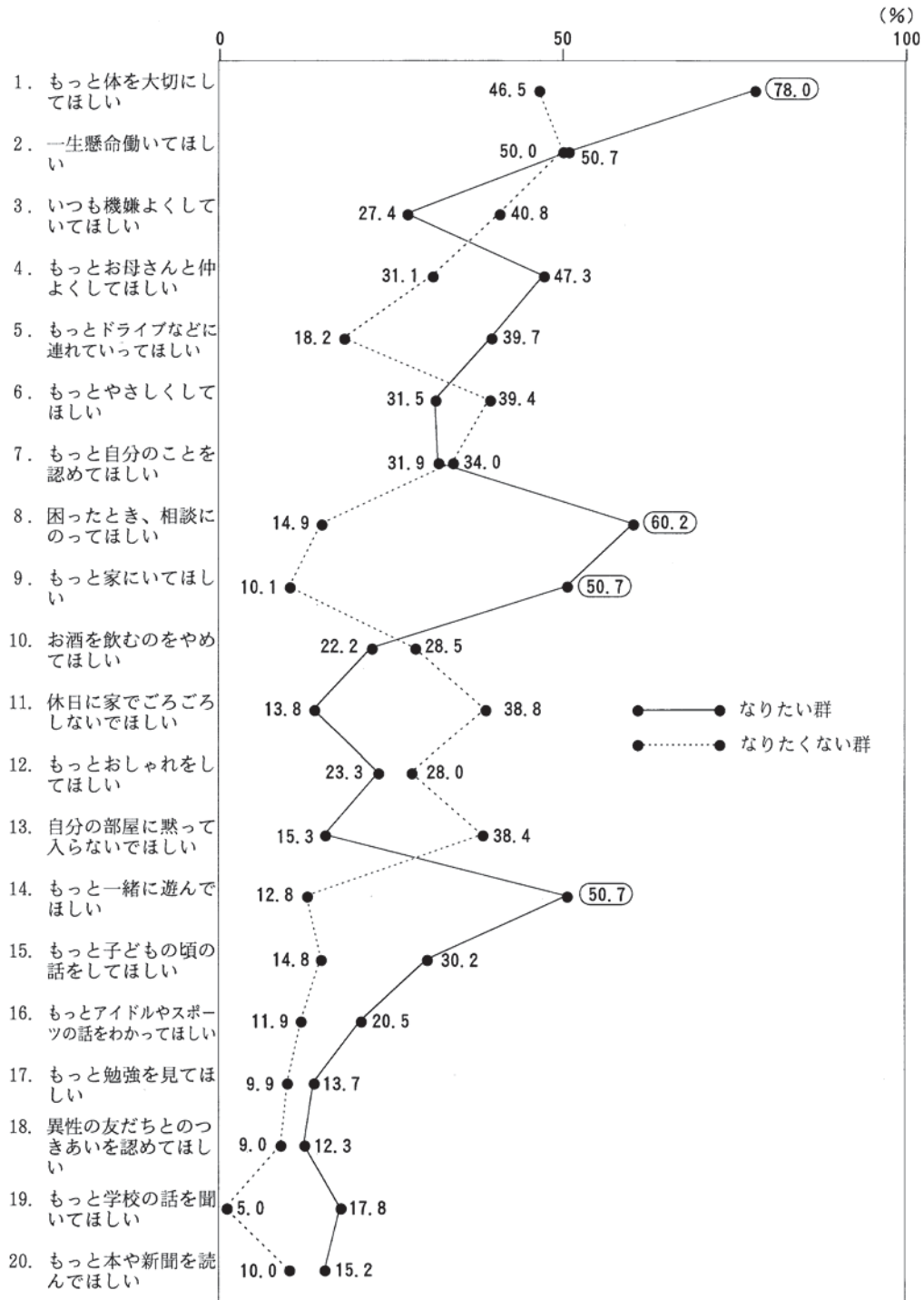
中学生の父親と子どもの関係は表面的にはあまり反抗的でなく良好な関係を保ち、お互いにほどほどに理解しているように思うが、心の交流や精神的な相談相手としては寂しいものである。しかし、子どもが自分の成長発達のモデルとして父親の存在を意識したとき、父親と精神的な交流ができ、心の支えにもなれそうである。そうした父親とは心理的な距離も密接な関係にある。成長発達のモデルとしての父親イメージとはどのようなものであろうか。次章で詳しくみていきたい。

(図1-20) 悩んだときお父さんに相談するか × お父さんのような人と結婚したい(女子)



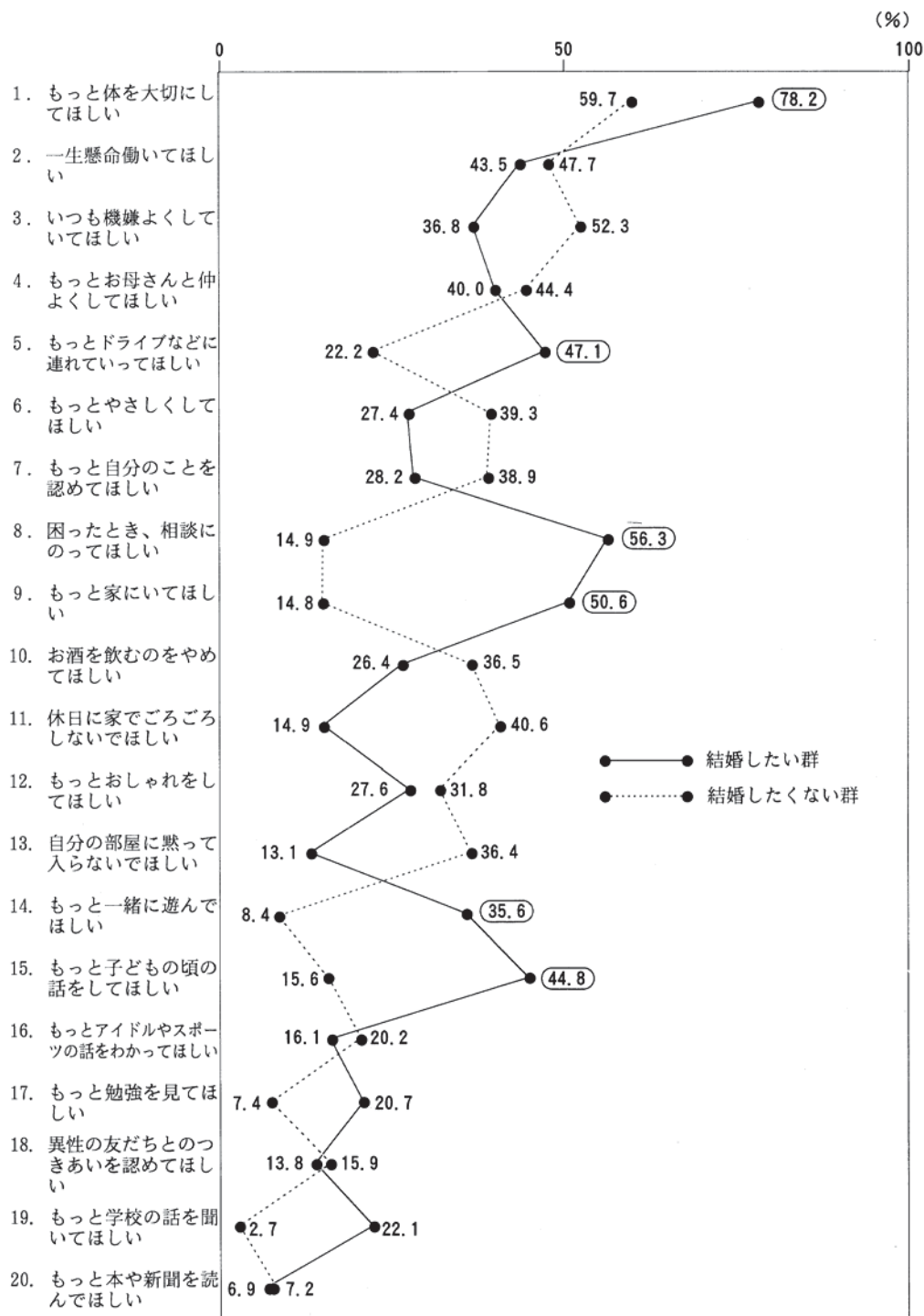
「絶対」+「たぶん」するだろうの割合

(図1-21) お父さんにして欲しいこと × お父さんのようになりたい (男子)



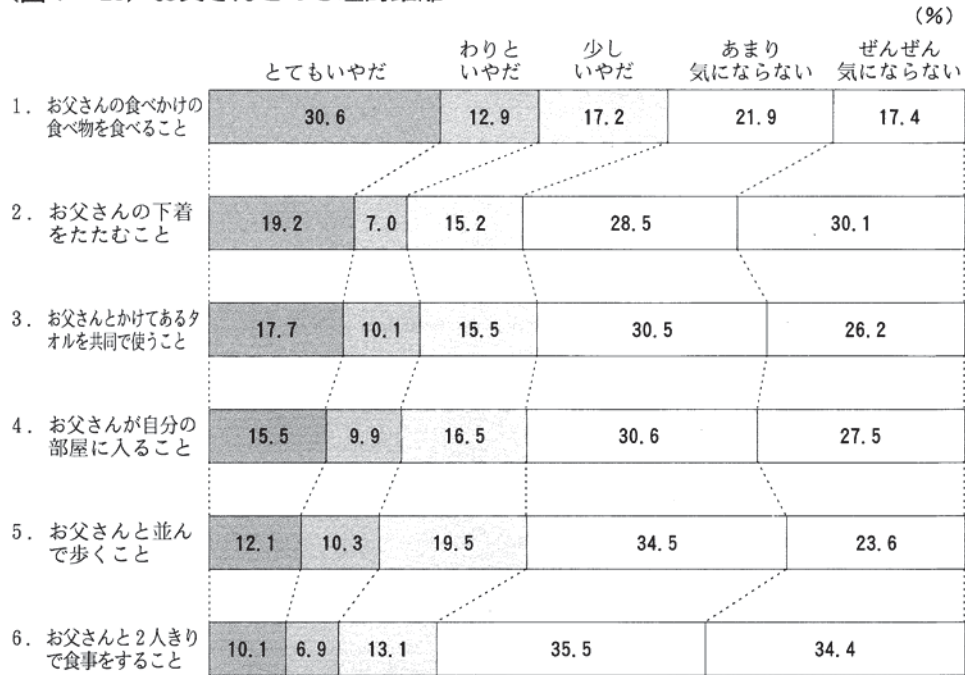
「とても」+「わりと」その割合

(図1-22) お父さんにして欲しいこと × お父さんのような人と結婚したい (女子)

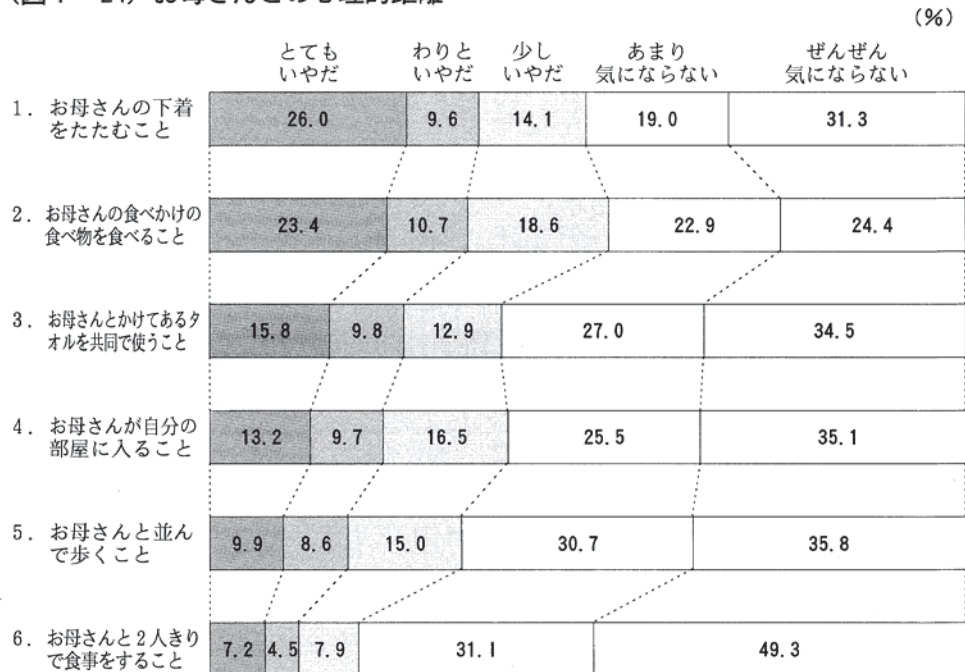


「とても」+「わりと」その割合

(図1-23) お父さんとの心理的距離



(図1-24) お母さんとの心理的距離



(表1-5) お父さんとの心理的距離 × 性別・学年

(%)

	お父さんとすること					
	全体	性別		性別・学年		
		男子	女子	1年	2年	3年
1. お父さんの食べかけの食べ物を食べる	30.6	31.1	> 30.1	28.5 < 30.1	32.1 < 28.2	33.5 < 31.4
2. お父さんの下着をたたむ	19.2	25.9	> 12.0	23.0 < 10.0	25.8 < 10.7	29.3 < 14.7
3. お父さんとかけてあるタオルを共同で使う	17.7	16.9	< 18.5	15.0 < 13.8	18.7 < 14.8	18.0 < 25.1
4. お父さんが自分の部屋に入る	15.5	11.9	< 19.5	9.3 < 15.3	11.9 < 18.6	14.9 < 23.7
5. お父さんと並んで歩く	12.1	10.1	< 14.3	8.7 < 8.9	11.1 < 14.1	11.6 < 18.8
6. お父さんと2人きりで食事をする	10.1	9.1	< 11.2	7.5 < 8.2	7.4 < 10.6	12.2 < 14.1

学年別は上段が男子
下段が女子
「とてもいやだ」の割合

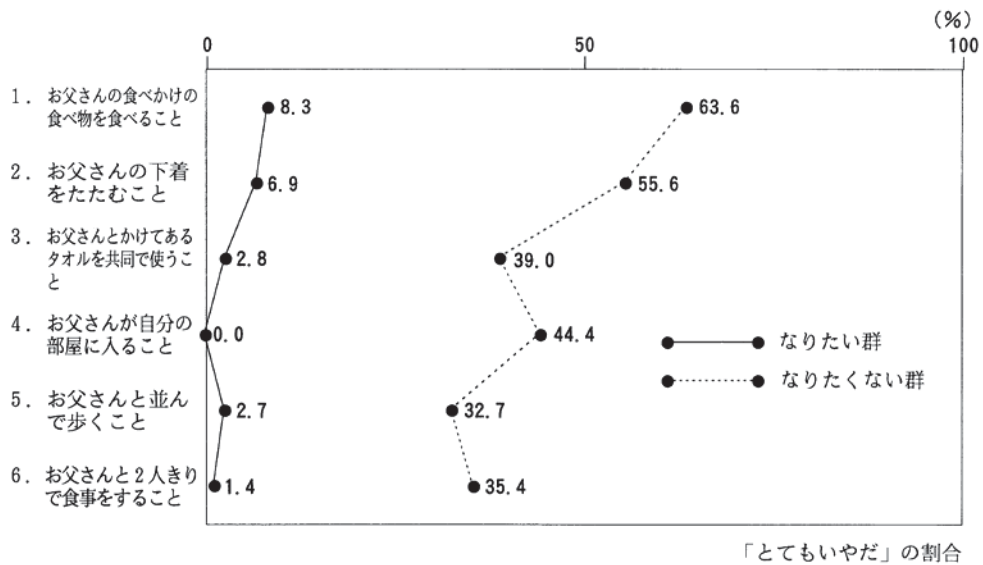
(表1-6) お母さんとの心理的距離 × 性別・学年

(%)

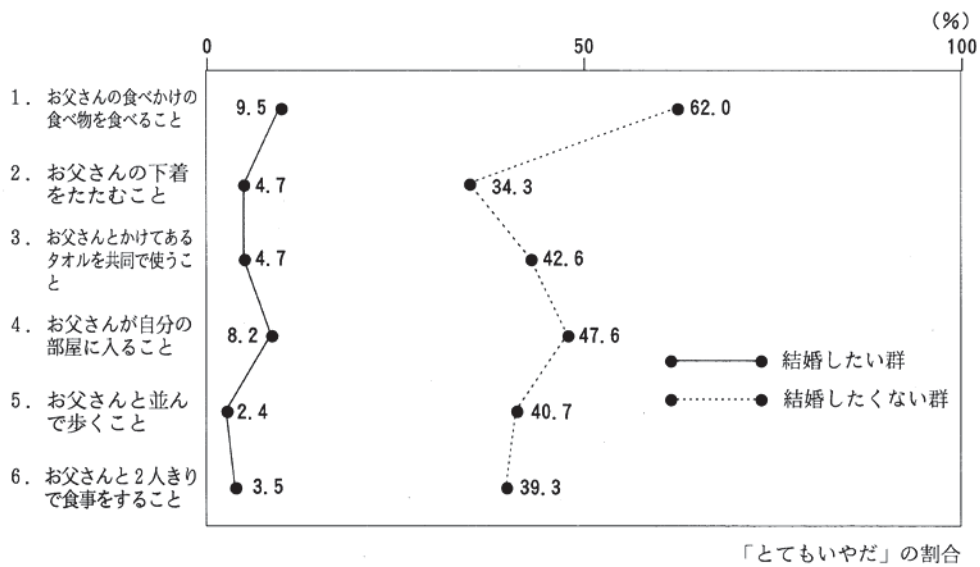
	お母さんとする事					
	全体	性別		性別・学年		
		男子	女子	1年	2年	3年
1. お母さんの下着をたたむこと	26.0	44.0	> 6.7	32.1 14.9	< 32.6 11.6	< 33.5 13.6
2. お母さんの食べかけの食べ物を食べる事	23.4	32.7	> 13.5	42.1 8.6	46.0 4.8	44.9 6.6
3. お母さんとかけてあるタオルを共同で使うこと	15.8	24.4	> 6.5	25.5 6.7	21.7 6.2	25.3 6.0
4. お母さんが自分の部屋に入る事	13.2	16.5	> 9.7	13.7 9.8	18.8 6.3	18.0 12.2
5. お母さんと並んで歩くこと	9.9	16.7	> 2.6	14.0 2.5	20.1 1.4	17.4 3.5
6. お母さんと2人きりで食事をすること	7.2	11.1	> 3.0	10.8 3.1	12.3 0.7	10.5 4.6

学年別は上段が男子
下段が女子
「とてもいやだ」の割合

(図1-25) お父さんとの心理的距離 × お父さんのようになりたい (男子)



(図1-26) お父さんとの心理的距離 × お父さんのような人と結婚したい (女子)



第Ⅲ章 中学生の父親イメージ



第Ⅱ章では、中学生と父親のコミュニケーションのありようをみてきた。第Ⅲ章では、中学生にとって、父親はどのような存在であ

るのかを探ってみたい。そこで、まず、子どもたちの目に映った父親の姿から追っていくことにしよう。

1. 家庭における父親の姿

図1-27は、父親が在宅時間をどのように過ごしているかを中学生にたずねたものである。図が示すように、子どもたちの目に映るのは、テレビを見たり、新聞や本を読んだり、ごろごろしたりする、「休息している父親」の姿である。自分の子どもが中学生ともなれば、社会の中堅としての活躍が期待される年齢である。せめて家にいるときはゆっくりして、英気を養いたいというのが多くの父親の本音であろう。

他方、子どもたち自身も、中学生になると部活動や塾でけっこう忙しく、休日も友だちと出かける機会が多くなっていく。仲間と、あるいは、1人で過ごす時間を好むようになり、父親に冷たい視線を浴びせ、何かにつけ反抗的になっても不思議はない。

こうしたことを考えると、「家族とおしゃべりをしている」が5割、「家族と出かけることが多い」「家事の手伝いや日曜大工をしている」が3割というのは、父親側としては、

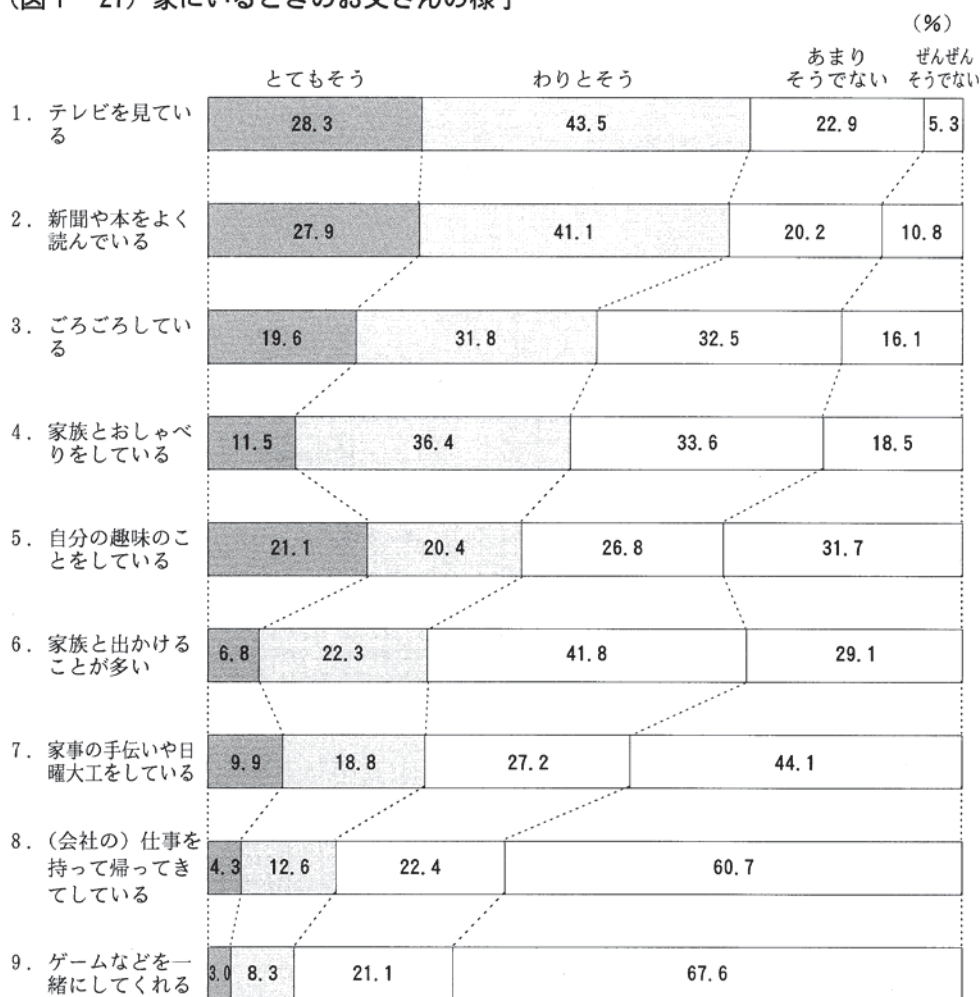
家族のことに心を配っている結果かもしれない。

図1-28は、子どもたちに、父親が家庭の中でどのような役割を果たすべきかをたずねたものである。伝統的に父親の役割と考えられてきた「お金を稼いで家族を養う」（「そう思う」が85.1%）、「家庭の中で重要なことを決定する」（72.7%）がやはり多いが、「家庭の雰囲気をやかにする」（66.7%）といった、これまでどちらかといえば母親の役割と思われてきたものも6割を超えている。父親像の変化を推測させるデータである。一

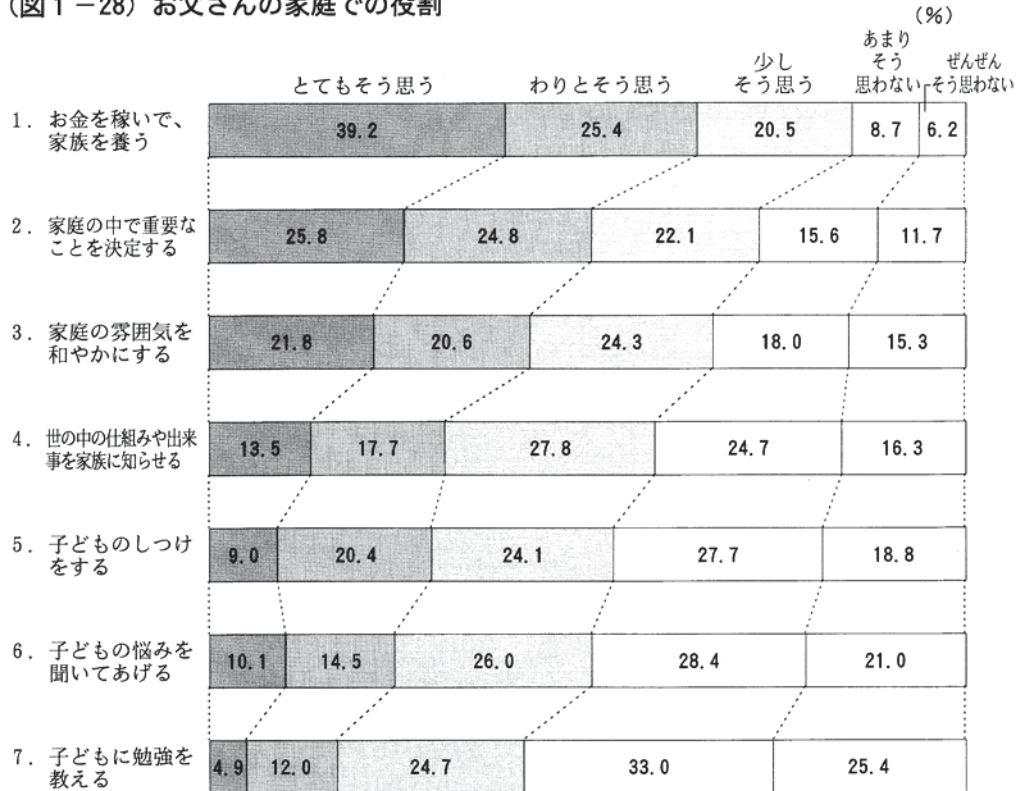
方、「世の中の仕組みや出来事を家族に知らせる」では、6割弱が「そう思う」ものの、「少しそう思う」（27.8%）の割合がもっとも多くなっているのに注目したい。情報社会の進展が、社会と家庭の懸け橋としての父親の役割を低下させたのであろうか。

また、図1-29をみると、中学生が考える家庭で父親が果たす役割については、性差はほとんどないことがわかる。「子どもの悩みを聞いてあげる」が男子に、「家庭の雰囲気を和やかにする」が女子に若干多い程度である。

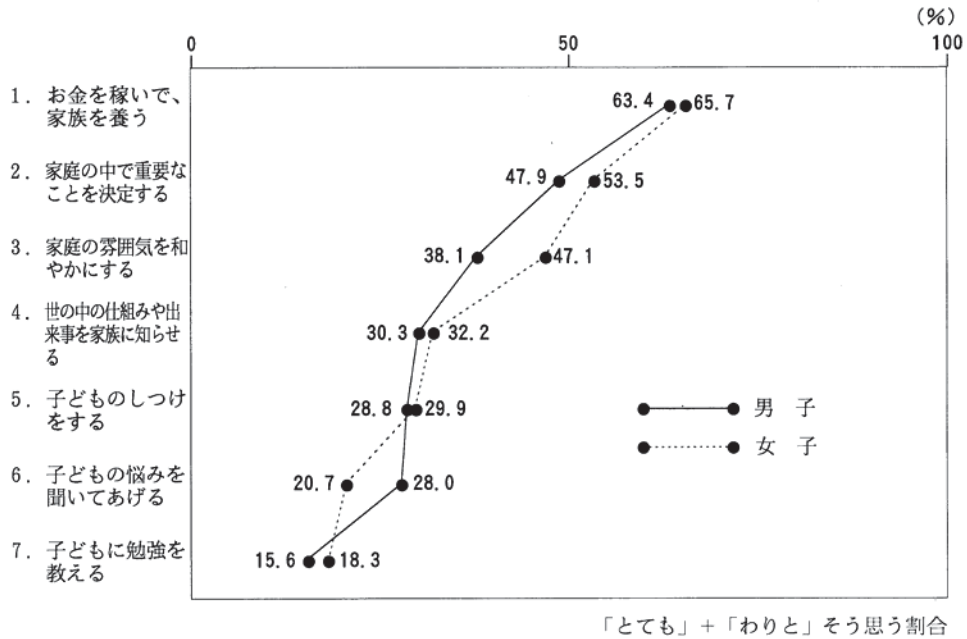
（図1-27）家にいるときのお父さんの様子



(図1-28) お父さんの家庭での役割



(図1-29) お父さんの家庭での役割 × 性別



2. 父親に叱られたこと

「厳父慈母」。「地震、雷、火事、オヤジ」。父親の厳しき、恐さを、かつてはこのように表現した。ところが最近では、「父親の権威失墜」や「やさしくなった父親」が語られることが多い。ほんとうに、父親の権威は失墜し、恐くなくなったのだろうか。そこで中学生に、父親に叱られたことについてたずねてみた。

まず、図1-30に示すように、「最近、叱られたことがある」のは28.2%で、中学生の7割は、最近、父親から叱られていないと答えている。「叱られた」と答えた者に、「どんなことで叱られたのか」をフリー・アンサーで聞いてみると、男女とも、「勉強のこと、成績のこと」が一番多かった。

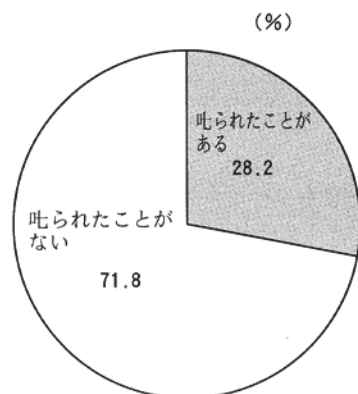
それ以外は千差万別であるが、回答を列挙すると、男子は、「だらしがない。部屋を片づけなかった。言葉づかいが悪い。使わない部屋は電気を消せ。ちゃんと窓をしめろ。テレビのチャンネル替え。テレビゲームのやりすぎ。弟をなぐった。6時すぎまで遊んでいた。自転車で車にひかれかけた。けんかをした。ライターを持っていた。タバコをすった。

うそをついた。万引きをした。」など、女子は、「家の手伝いをしない。朝起きるのが遅い。だらしがない。部屋を片づけなかった。言葉づかいが悪い。『行ってきます』くらい言え。音楽を聴きながら勉強するな。言うことをきかなかった。兄弟げんかをした。習いごとを休んだ。部活動の帰りが遅い。異性とのつきあい。」などである。

父親から叱られた理由をながめると、非行が心配されるような重大なことはもちろん、日常生活の、どちらかというとき些細なことまで、子どもたちの世話を焼こうとしている父親の姿がうかがわれる。

次に、図1-31は、何か悪いことをしたときに、父親がどのくらい怒ると思うかをたずねたものである。上位の「行き先も言わずに出かけて夜中の12時頃帰ってきたとき」「約束を守らなかったとき」「人のものをとったとき」「タバコをすったとき」などは、父親からかなり叱られるだろうと覚悟している。しかし、父親の叱り方については、いきなり「どなられる」と思う者は少なく、「夜中の12時頃帰ってきたとき」(40.5%)、「タバコを

(図1-30) 最近、お父さんから叱られたか

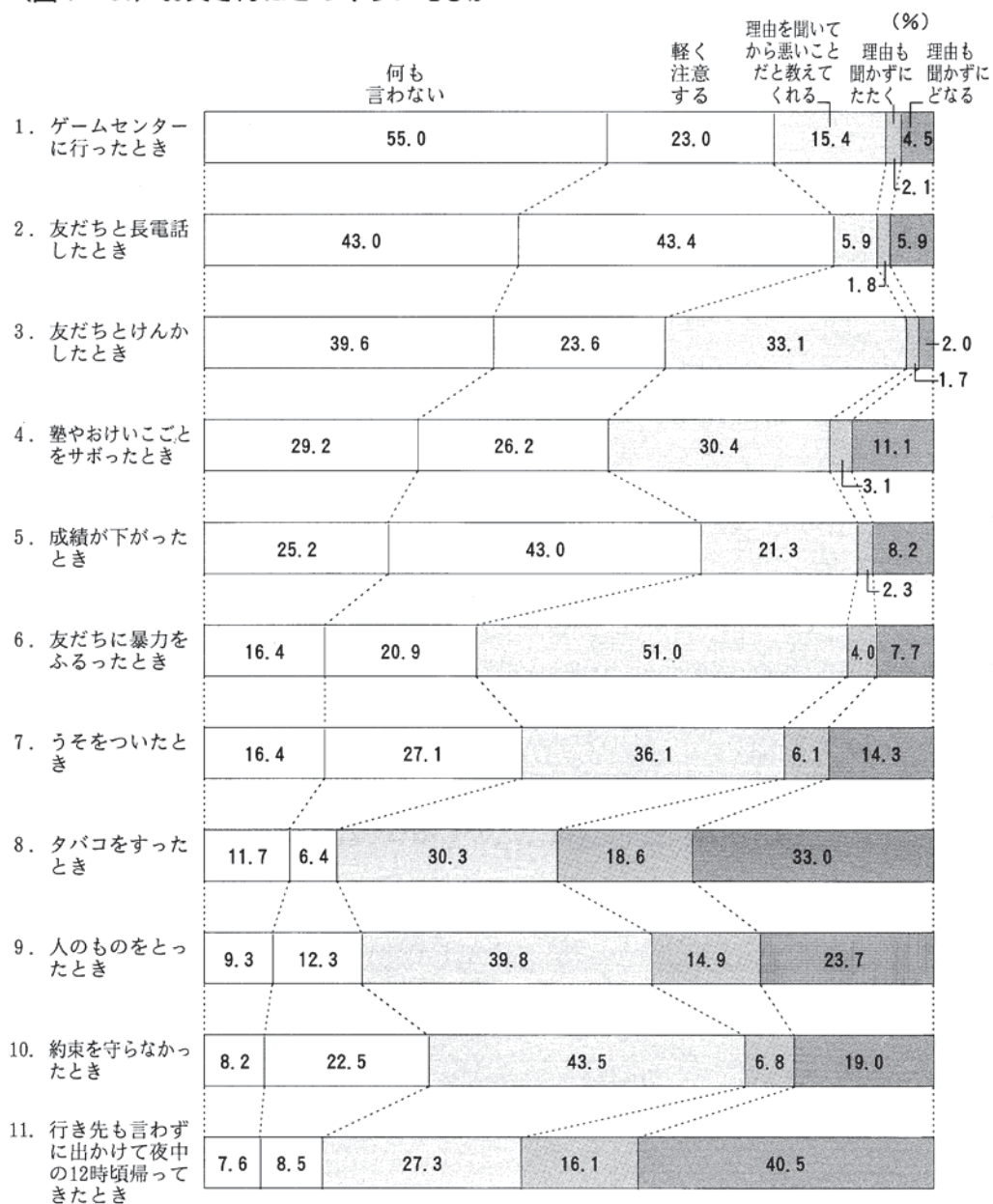


すったとき」(33.0%)、「人のものをとったとき」(23.7%)が2割を超えるぐらいである。叱られるにしても、父親は「理由を聞いてから悪いことだと教えてくれる」と考えているようだ。「人のものをとったとき」ですら、「理由も聞かずにどなる」のが2割強、

「理由も聞かずにたたく」が1.5割であるのに対して、「理由を聞いてから悪いことだと教えてくれる」は4割となる。

さらに、お父さんに叱られたときの気持ちをたずねた表1-7をみると、「後で考えると叱られても仕方がなかったと納得できる」

(図1-31) お父さんはどのくらい叱るか



(37.5%) がもっとも多いのがわかる。

こうしたデータから考えると、たしかに全体として、父親の姿は、かつてのカミナリ・オヤジのイメージからだいぶソフトになってきたように思われる。けれども、それは、父親の権威が失墜したというよりも、家族に気

を配る父親、子どもを理解し、子どもからも理解されようとする父親が増えてきたというべきではないだろうか。

(表1-7) お父さんに叱られたときの気持ち

	(%)		
	全 体	男 子	女 子
1. 叱られても当然のことをしたと思うことが多い	19.1	22.9	14.9
2. 後で考えると、叱られても仕方がなかったと納得できることが多い	37.5	37.2	37.7
3. お父さんの気まぐれで叱られたと思うことが多い	4.7	5.3	4.1
4. お父さんは自分の気持ちをわかってくれないと思うことが多い	19.4	15.8	23.4
5. お父さんには関係ないと思うことが多い	19.3	18.8	19.9

3. 父親とうまくやっていくには

さて、表1-8は、子どもたちに、父親との関係をたずねた結果である。これをみると、中学生の85%は「うまくいっている」と答えている。「うまくいっていない」と答えた残りの15%が気になるが、ここでは、中学生が、父親とよい関係を作るために何が重要であると考えているかをみてみよう。

図1-32によると、「言われたことはきちんとやる」(「とても+わりと」で58.2%) がもっとも多く、「家の手伝いをよくする」(49.8%)、「お母さんの言うことをよく聞く」(39.7%)が続いている。反対に、「父の日や誕生日にプ

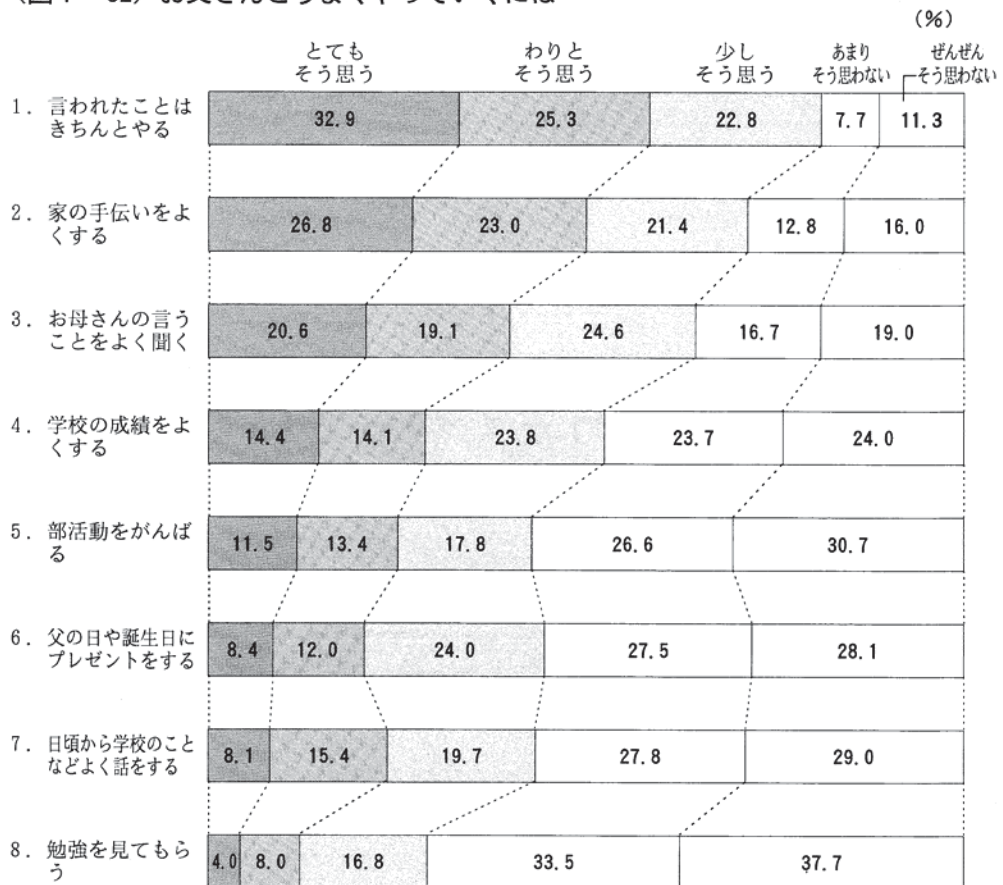
レゼントをする」(20.4%)、「日頃から学校のことなどよく話をする」(23.5%)などは、それほど重要とは考えられてはいない。

図1-33で性差をみると、女子のほうが、父親とよい関係を保つために「何かをすること」が重要であると考えられる傾向があるようだ。また、項目別にみると、男子は「学校の成績をよくする」や「部活動がんばる」を、女子は「家の手伝いをよくする」や「お母さんの言うことをよく聞く」のほか、「日頃から学校のことなどよく話をする」をあげる者が多いのがわかる。

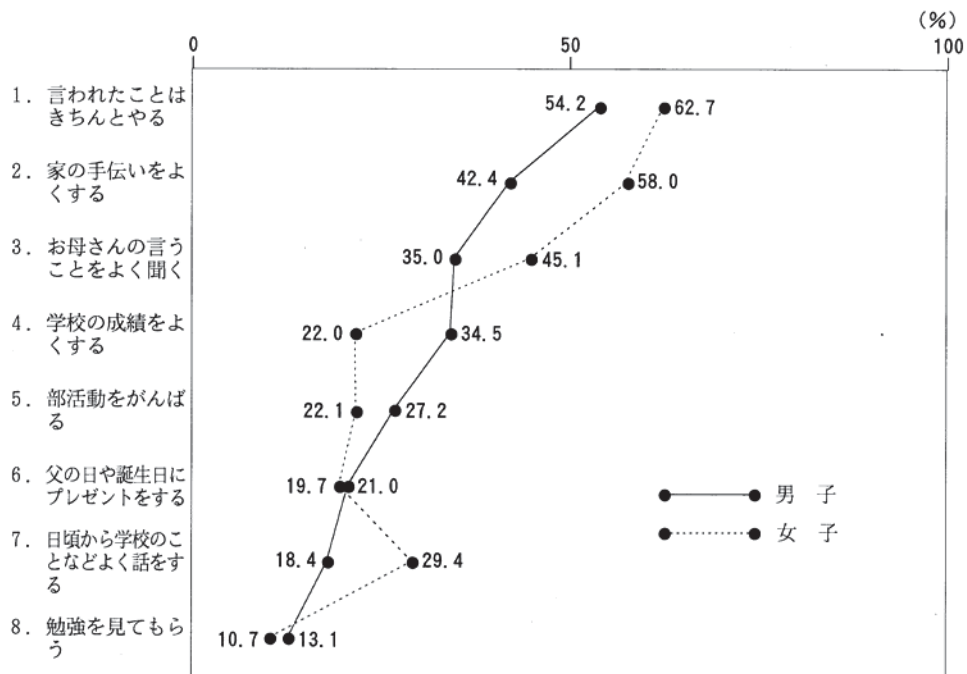
(表1-8) お父さんとの関係は

	(%)				
	とてもうまく いっている (いた・だろう)	かなりうまく いっている (いた・だろう)	ややうまく いっている (いた・だろう)	あまりうまく いない (かった・だろう)	ぜんぜんうまく いない (かった・だろう)
小学5～6年生の頃は	34.2	26.5	29.6	5.7	4.0
	90.3			9.7	
中学生になって	29.4	23.9	31.4	7.8	7.5
	84.7			15.3	
高校生になったとき	27.0	22.1	32.6	9.9	8.4
	81.7			18.3	

(図1-32) お父さんとうまくやっていくには



(図1-33) お父さんとうまくやっていくには × 性別



「とても」+「わりと」そう思う割合

4. 職業人としての父親

次に、視点を変えて、子どもたちが、職業人としての父親をどのようにみているかをみてみよう。

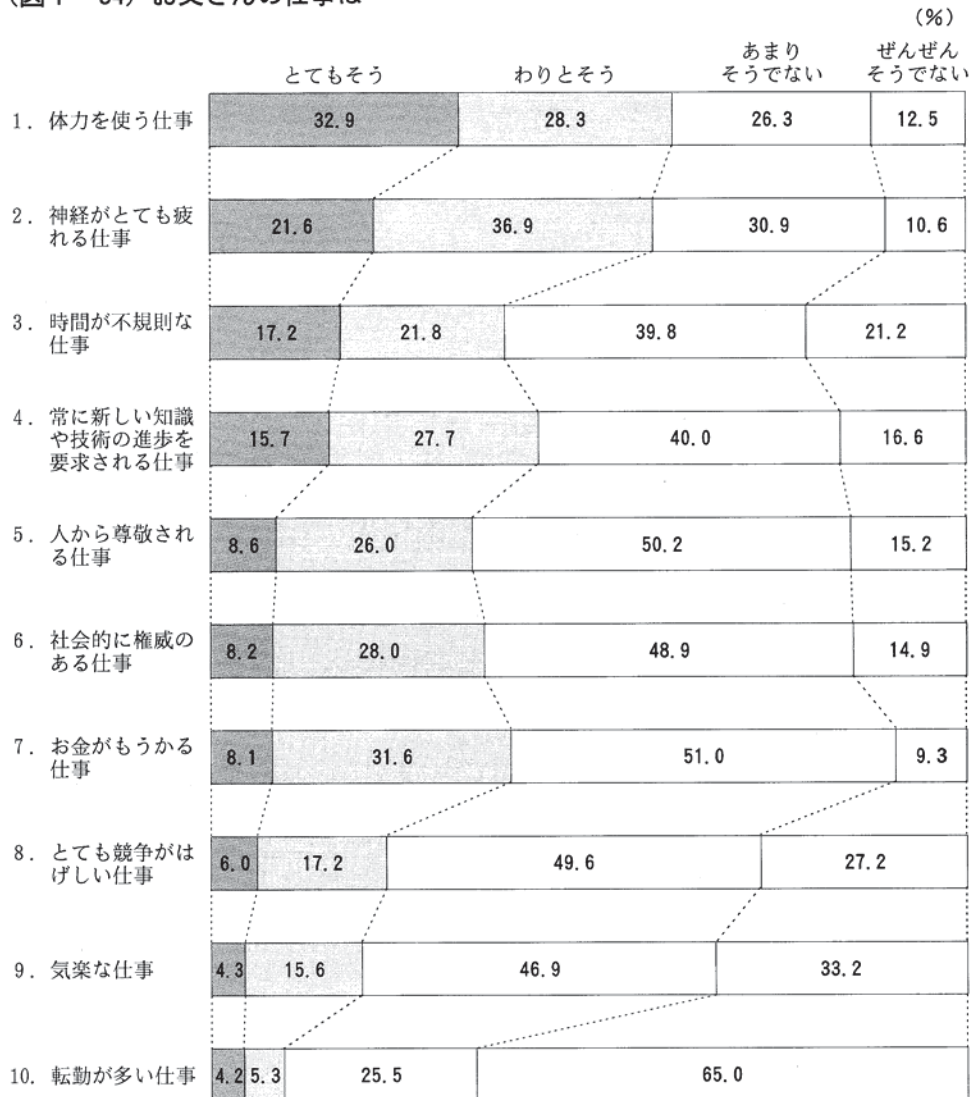
第Ⅱ章でみたように、子どもたちの75%は、父親の仕事の内容を「知っている」と答えている(図1-7)。そこで、図1-34は、父親の仕事がどのような性質のものか、もう少し

掘り下げてたずねたものである。

これを見ると、「体力を使う仕事」「神経がととも疲れる仕事」と答えた者が6割と多く、「常に新しい知識や技術の進歩を要求される仕事」も4割を超え、「とても競争がはげしい仕事」でも2割ほどいる。

父親の仕事について、「人から尊敬される

(図1-34) お父さんの仕事は



か」「社会的に権威があるか」「お金がもうかるか」と聞かれると、自信をもって「とてもそう」と答えられる子どもは1割に満たないが、「気楽な仕事か」に対しては、8割が「(ぜんぜん、あまり) そうでない」と答えている。父親の仕事がそれほどカッコイイとは思えないが、体力や神経を使い、それなりにたいへんだろう、というのが平均的な中学生の理解のようだ。

さらに表1-9は、仕事を休む理由になりそうなケースを4つ想定して、そのような場合に、父親が仕事に行くか、それとも休むか

をたずねたものである。これをみると、授業参観なら仕事を優先し(「仕事に行くだろう」84.0%)、38度くらいの熱ならば、がんばって仕事をする(「仕事に行くだろう」57.6%)、けれども、子どもが病気で入院したときは、病院につきそい(「仕事を休むだろう」64.6%)、前から家族旅行が決まっていたなら、できるだけ予定通り旅行に行く(「仕事を休むだろう」54.9%)、という結果が出ている。

「仕事もがんばるけれども、家庭も大事にする」お父さんの姿がうかがわれる。

(表1-9) お父さんは仕事を休むか

	(%)			
	絶対仕事に行くだろう	たぶん仕事に行くだろう	たぶん仕事を休むだろう	絶対仕事を休むだろう
1. 38度くらいの熱があったとき	24.4	33.2	29.9	12.5
2. 父親参観日に急に仕事で出かけなくてはならなくなったとき	38.3	45.7	12.0	4.0
3. 家族で旅行を計画していた日に仕事ができてしまったとき	15.3	29.8	37.6	17.3
4. 子どもが病気で入院したとき	11.8	23.6	37.6	27.0

第Ⅳ章 まとめに代えて



最後に、まとめをかねて、子どもたちに「父親がどんな人であるか」をたずねた図1-35をみてみよう。

これをみると、父親のイメージとして、「頼りになる」(65.9%)、「やさしい」(65.4%)をあげる者がもっとも多く、「物知りである」(63.0%)、「スポーツが好き」(56.5%)がそれに続いている。

それほど「威厳がある」(35.2%)わけではないが、そうかといって、「友だちみたい」(20.0%)ではない。「自分の考えにしたがわせようとする」(32.1%)よりも、「気持ちを理解して」(37.9%)、「相談にのってくれる」(35.1%)父親である。子どもたちの5割が父親を「尊敬できる」(51.0%)と答えているのも、うなずけよう。

父親が変わってきたといわれる。たしかに今回の調査でも、横のものを縦にもしないような威厳に満ちたガンコ・オヤジの姿は薄れ、

代わって、「仕事もがんばるけれど、家族も大切にする父親」「細かなことに気を配り、家庭の雰囲気や和やかにする父親」「悪いことをしたときは、理由を聞いてから、なぜいけないかを教えてくれる父親」「やさしくて、頼りになり、尊敬できる父親」が登場してきた。ここにみられる父親イメージは、これまで母親の役割と考えられてきたものまで引き受け、しかも、父親役割も十分にこなし、子どもから尊敬される父親である。新しいタイプの父親像ということができよう。

ただ、こうした「よくできた」父親の存在は、子どもの人間形成にどのような影響を及ぼすのか。また、父親と母親の違いや役割分担はどうなるのか。あるいは、当の父親自身は、子どもに何を期待し、どのような生き方をしようとしているのか、など、合わせて考えるべき問題も少なくない。

(図1-35) お父さんはどんな人か

